

剣崎稻荷塚遺跡4

－ 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

2016

高崎市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所

例　　言

1. 本書は、宅地造成に伴う劍崎縄荷塚遺跡4の発掘調査報告書である。
2. 本調査および整理作業から本書作成に至る経費は、地権者の櫻井宏衛氏に負担して頂いた。
3. 本遺跡は、群馬県高崎市劍崎町字福荷塚766番1、766番2に所在している。
4. 本調査及び整理作業は、事業主・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による二者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監督のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
5. 発掘調査は、南田法正（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
遺構測量は小出琢磨（有限会社毛野考古学研究所）がおこなった。
空撮は利久拓照（有限会社毛野考古学研究所）・小出がドローンを使用して実施した。
6. 発掘調査・整理作業は以下の期間で実施した。
【発掘調査】 平成27年10月1日～同年11月11日
【整理作業】 平成27年11月12日～平成28年5月31日
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で656である。
8. 本書の執筆については、I章を矢島 浩（高崎市教育委員会）、それ以外の執筆と編集を南田が行った。
本書作成に関わる分担を以下に記す。
遺物写真撮影 井上 太（有限会社毛野考古学研究所）
遺物実測・観察表作成 古墳時代以降：有山径世・小此木真理・李スルチヨン（有限会社毛野考古学研究所）
縄文～弥生時代：浅間 陽（有限会社毛野考古学研究所）
縄文時代石器：日沖剛史（有限会社毛野考古学研究所）
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下のとおりである。（順不同・敬称略）
【発掘調査】
森山孝男 小関泰洋 永井述史 岡庭秋男 松本幸男 横元裕児 龟田浩子
【整理作業】
磯 洋子 小谷貴世美 小関百合 竹中美保子 真下弘美 龟田浩子 合田幸子 武士久美子
日沖奈美子 深谷道子 山口昌子 半澤利江 永井祐二 山下奈邦子
11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏のご協力を賜った。記して心より感謝申し上げます。
(順不同・敬称略)
櫻井宏衛 株式会社ハウスプランナー 株式会社コスマックス
鈴木徳雄 谷藤保彦 山口逸弘 間根慎二

凡　　例

1. 掘図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いた。
2. 遺物・遺物圖の縮尺は以下の通りである。掘図中にはスケールを付して表示してある。
遺構 全体図 1/120、1/200
　　縫穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・上層断面図等：1/30、1/60、1/80、1/100
遺物 土器類・陶器類・金属製品・石器・石製品等：1/1、1/2、1/3、1/4
3. 遺構遺土および土器の色調觀察は
『新版 標準土色帖』(農林水産技術会議事務局 財團法人日本色彩研究所監修 2006)に従っている。
4. 遺物番号は、遺物図版・実測図・観察表とともに共通である。
5. 遺構一覧表・遺物観察表に示した計測値・形状などの（ ）は復元推定値・推定形状、（ ）は残存値を表す。
6. 本書で使用する火山灰指標テフラの略称は以下のとおりである。
As - A : 浅間A軽石（1783年） As - B : 浅間B軽石（1108年）
As - C : 浅間C軽石（3世紀後葉～末葉） As - YP : 浅間一板山黄色軽石（13000～14000y.B.P.)
As - BP Group : 浅間一板山褐色軽石群（19.000～24.000y.B.P.)
Hr - FA : 横名山ニツ岳渋川テフラ (Hr - S・6世紀初頭)
Hr - FP : 横名山ニツ岳伊香保テフラ (Hr - I・6世紀中葉)
B混土 : As - B混入土 A混土 : As - A混入土
7. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」。
第2図は国土交通省国土地理院発行1/25,000「下室田」「富岡」を使用した。

目 次

例 言
凡 例
目 次

I	調査に至る経緯	1	IV	基本層序	5	
II	地理的・歴史的環境	1	V	遺構と遺物	7	
	1. 地理的環境	1		1. 遺跡の概要	7	
	2. 歴史的環境	3		VI	まとめ	38
III	調査の方法と経過	5				
	1. 調査の方法	5				
	2. 調査の経過	5				

写真図版
抄 錄
奥 付

挿 図 目 次

第 1 図	調査区域図	1	第 14 図	遺構図 (6) 土坑・ピット [中近世・古代]	23
第 2 図	遺跡の位置	2	第 15 図	遺構図 (7) 土坑・ピット [古代・縄文]	24
第 3 図	周辺の遺跡	3	第 16 図	遺構図 (8) 土坑・ピット [縄文]	25
第 4 図	基本層序	6	第 17 図	遺物図 (1) SI-1・SI-2	26
第 5 図	遺構全体図 (1)	6	第 18 図	遺物図 (2) SI-3・SI-4・SI-5/ SK-1・SK-3	27
第 6 図	遺構全体図 (2) 時期別 [1]	9	第 19 図	遺物図 (3) SK-8・9・14・16・17・18・23・ 25・26・27・28・36・37・39	28
第 7 図	遺構全体図 (3) 時期別 [2]、 道路拡張区 [北部・中央部・南部]	10	第 20 図	遺物図 (4) SK-53・56・59・71・75・76・ 78・81・82	29
第 8 図	遺構全体図 (4) 土坑・ピット	11	第 21 図	遺物図 (5) SK-86・87 (P-300) / P-45・56・ 91・118・121・188・222・229・ 235・246・256・266・287・288	30
第 9 図	遺構図 (1) SI-1	18	第 22 図	遺物図 (6) 遺構外出土遺物 (1~23)	31
第 10 図	遺構図 (2) SI-2・3・4	19	第 23 図	詳細遺跡分布図	39
第 11 図	遺構図 (3) SI-5・6・7・掘立柱建物跡・ 柱穴列 [中近世]	20			
第 12 図	遺構図 (4) 掘立柱建物跡・柱穴列 [古代]	21			
第 13 図	遺構図 (5) 掘立柱建物跡 [古代]・柱穴列 [縄文]	22			

挿 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧	4	第 13 表	SI-3出土遺物観察表①	32
第 2 表	住居跡・竪穴状遺構一覧表	12	第 14 表	SI-3出土遺物観察表②	33
第 3 表	掘立柱建物跡・柱穴列一覧表	12	第 15 表	SI-4出土遺物観察表	33
第 4 表	土坑一覧表①	13	第 16 表	SI-5出土遺物観察表	33
第 5 表	土坑一覧表②	14	第 17 表	土坑出土遺物観察表①	33
第 6 表	ピット一覧表①	14	第 18 表	土坑出土遺物観察表②	34
第 7 表	ピット一覧表②	15	第 19 表	土坑出土遺物観察表③	35
第 8 表	ピット一覧表③	16	第 20 表	土坑出土遺物観察表④	36
第 9 表	ピット一覧表④	17	第 21 表	ピット出土遺物観察表①	36
第 10 表	諸跡一覧表	17	第 22 表	ピット出土遺物観察表②	37
第 11 表	SI-1出土遺物観察表	32	第 23 表	遺構外出土遺物観察表	37
第 12 表	SI-2出土遺物観察表	32			

写真図版目次

- PL. 1 剣崎縄荷稼遺跡4 空堀全景（上が北）
剣崎縄荷稼遺跡4 鋼文道構群 空堀全景（上が北）
- PL. 2 調査区 全景（西）
道路拡張区【中央部】全景（北東）
道路拡張区【北部】全景（東西）
道路拡張区【南部】全景（南西）
SI-6【道路拡張区南部】全景（北西）
- PL. 3 SI-1 全景・遺物出土状況（西）
SI-1 土坑1 土層断面（南）
SI-1 好敵穴 遺物出土状況（南西）
SI-3 完羅・SI-1 深り方 全景（西）
SI-3・SI-1 深り方 全景（西）
SI-3 捕泥炉・土坑2（旧伊）全景（西）
SI-2 深り方 全景（西）
SI-2 土層断面（北東）
- PL. 4 SI-4 全景・土層断面（北）
SI-5・P-230 全景・遺物出土状況（南西）
SL-1 塗土検出状況（西）
SK-1 全景（西）
SK-3 全景・遺物出土状況（東）
SK-3 遺物出土状況 近景（南東）
SK-3・16 全景（東）
SK-5 全景（東）

- PL. 5 SK-9 全景（南）
SK-13（奥）・40 全景（北東）
SK-17・40 全景（東）
SK-25 全景・副葬品出土状況（南）
SK-25 土層断面（東）
SK-26・SK-27・P-45 全景（北）
SK-35（柱穴）土層断面（西）
SK-54（柱穴）土層断面（西）
- PL. 6 SK-72 全景・遺物出土状況（南東）
SK-81 全景・遺物出土状況（東）
鋸文土坑群 全景（南）
中近世ビット群・SD-1 全景（西）
P-70 遺物出土状況（西）
P-121 全景・副葬品出土状況（西）
P-158 滲製石斧・被熱隕出土状況（東）
P-226 馬糞転出状況（南）

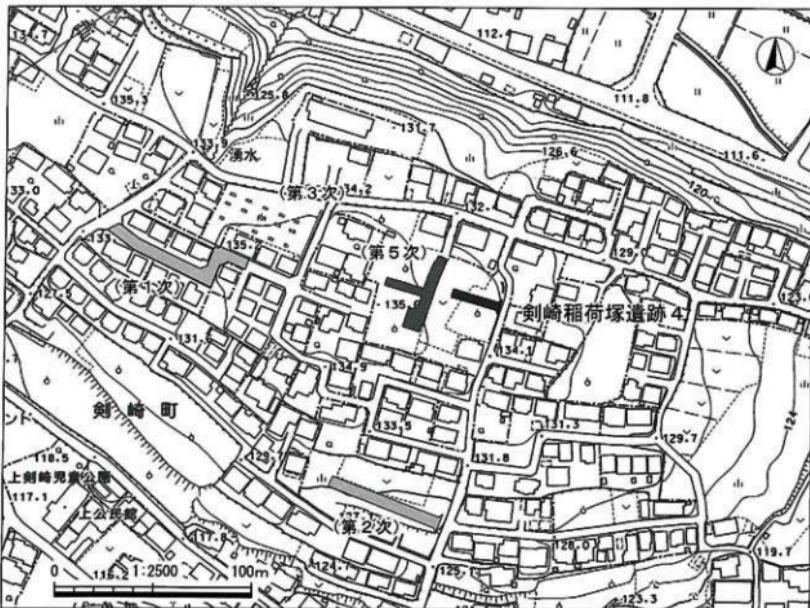
- PL. 7 出土遺物（1）住居跡・壁穴状遺構
- PL. 8 出土遺物（2）土坑①
- PL. 9 出土遺物（3）土坑②・ビット
- PL. 10 出土遺物（4）遺構外出土遺物

I 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月、土地所有者櫻井宏衛氏と施工責任者である今井開発株式会社から、高崎市剣崎町において計画している宅地分譲造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。

当該地は周知の埋蔵文化財包載地である剣崎稻荷塚遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 5 月 26 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年 6 月 25 日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、縄文時代から平安時代の豊穴建物を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「剣崎稻荷塚遺跡 4」とした。平成 27 年 9 月 28 日に文化財保護法に基づく届出が提出された。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成 27 年 9 月 18 日に櫻井宏衛氏と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に櫻井宏衛氏・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三社協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第 1 図 調査区域図

II 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

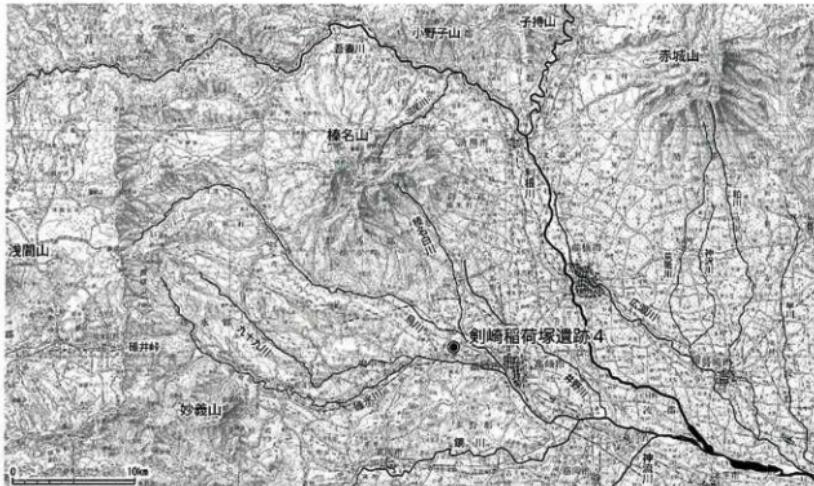
剣崎稻荷塚遺跡 4 は群馬県高崎市の西方、鳥川左岸の八幡台地の北縁中央部付近に所在する。

高崎市は関東平野最奥部にあたり、北西に榛名山、北東に赤城山、西に妙義山と浅間山を望む。地形的には五つ（低地帯・低台地・洪積台地・扇状地・丘陵）に大別できるようである。

井野川と烏川に挟まれた市の中央部は「高崎台地」と呼ばれる低台地にあたり、北西—南東方向に流下する中小の河川や支谷に浸食される。井野川と広瀬川（旧利根川）に挟まれた広大な地域が「前橋台地」であり、現利根川は台地中央部を貫流する。高崎台地～前橋台地の下部には、利根川扇状地が形成した厚さ 100 m の前橋砂礫層が堆積する。浅間一板鼻褐色輕石群（As - BP Group）降下期間中の 1.9 ~ 2.0 万年前頃には、黒斑山崩壊に伴う浅間応桑岩屑などれに起因した前橋泥流が、15 m 前後の厚さで前橋砂礫層を覆う。1.6 万年前頃、榛名山東南麓に起こった陣場岩屑などれは最大厚 40 m の「相馬ヶ原扇状地」を形成し、これが原因となって、利根川が広瀬川低地へと河道変遷したといわれている。1.3 万年前頃には浅間一板鼻黃色輕石（As - YP）が降下し、1.1 万年前頃に井野川泥流が数 m の厚さで堆積する。これ以降、烏川と井野川は現河道に固定され、井野川泥流堆積物と前橋泥流堆積物を浸食しながら、高崎台地と井野川段丘面を形成する。高崎台地南縁は井野川・烏川・錦川の合流点となっている。台地北縁は相馬ヶ原扇状地末端に接し、井野川左岸では扇状地に特徴的な細長い舌状台地と低地が南北方向に交互に並ぶ。榛名白川右岸の扇状地では放射状に展開する浸食谷が深く、様相が異なる。

烏川・碓井川右岸にあたる市の南側は安中市・富岡市・旧榛名町から続く第三紀系丘陵の東端部にあたり、「觀音山丘陵」・秋間丘陵と呼ばれる。標高 200 ~ 300 m で、起伏の激しい地形が発達する。秋間丘陵の東縁は宇板谷戸を境にして洪積台地の「八幡台地」となり、烏川と碓井川の合流点に接する。八幡台地上はローム層が厚く、浅間一板鼻黃色輕石（As - YP）も比較的厚い。台地内部は東西方向の谷地に開析され、北の劍崎支台、中央の若田支台、南の八幡支台に分かれる。本遺跡は劍崎支台のほぼ東端部に位置し、北縁は急崖、西方は劍崎稻荷塚遺跡 3 で確認した埋没谷によって両されて、この埋没谷は湧水点にもなっている。南縁と東側はやや急な緩斜面であり、遺跡地全体としては独立丘状を呈する。こうした地形的限界性は、縄文時代の集落形成に大きく関わっていたと推測されるが、古墳時代以降も一定の影響を及ぼしていたと推測する。明治時代以降に上水道施設が長瀞地区に造成され、昭和 30 年代の地図を見ると遺跡地一帯は大半が果樹園や畠地であるが、近年は住宅密集地に変貌している。

以上の高崎台地・觀音山丘陵・八幡台地を浸食する井野川・烏川・碓井川は、幅の広い低地帯をそれぞれ形成しており、自然堤防状の微高地や段丘面を形成している。



第2図 遺跡の位置（国土地理院発行 200,000 分の 1 地勢図を縮小改変）

2. 歴史的環境

八幡台地は遺跡密集地帯で、本遺跡は北側の剣崎支台に立地する。以下、周辺遺跡の概略を記載する。

市内では旧石器時代遺跡が極めて乏しいながら、碓井川右岸の岩鼻坂上北遺跡では木葉形尖頭器が1点出土している。八幡台地にはAs-YP下部にローム層が厚く堆積しており、今後の発見が期待される。縄文時代草創期では、剣崎支台の剣崎長瀬西遺跡（5）において爪形文土器・多縄文系土器・有舌尖頭器等がややまとまって出土し、特筆される。大島原遺跡（7・現西部小学校）、八幡中原遺跡（13）、八幡遺跡（16）でも有舌尖頭器等が出土しており、活発な活動がうかがえる。剣崎長瀬西遺跡では早期前半～中葉の押型土器もまとめて出土している。木遺跡の1次・2次調査でも住居跡が確認されており、黒浜・有尾式期1棟、中期後葉1棟、後期1棟となっている。剣崎支台の若田原遺跡（10・現八幡霧園）は、前期末葉の住居跡1棟のほか、中期後半～後期中葉の住居跡23棟が確認されており、拠点的環状集落の可能性が高い。その東約700mの位置にある大島原遺跡でも、早期後半・前期後葉・中期中葉の土器とともに、中期後葉の住居跡3棟が確認されている。

弥生時代後期には樽式期の中へ大規模集落が出現する。八幡遺跡では、52棟（古墳時代前期初頭を一部含む）の住居跡と、土坑墓および推定砾床墓が計7基確認されている。剣崎長瀬西遺跡では78棟（古墳時代前期初頭を一部含む）もの住居跡が調査されている。剣崎支台東端の引間遺跡（3）でも37棟の住居跡と方形周溝墓が検出されている。

古墳時代前期集落では、八幡遺跡で40棟以上、剣崎長瀬西遺跡で16棟が認められ、立地は樽式期から踏襲するものの、集落規模はやや縮小する。中期では剣崎長瀬西遺跡で52棟、隣接する大島原遺跡で11棟の住居跡が確認されており、大規模集落と想定される。八幡中原遺跡では古墳中期～奈良・平安時代の住居跡176棟が調査され、古墳後期がその大半を占める。剣崎長瀬西遺跡・八幡中原遺跡や七五三引遺跡（11）では中期と後期の住居跡等から韓式系土器が出土しており、剣崎長瀬西遺跡の馬埋葬土坑には梯子形立聞付X字銘留梢円形鏡板付簪が副葬され、10号墳からは金製垂飾付耳飾が出土するなど、八幡・剣崎地域は渡来系遺物の分布域として特記される。



※図中、グレーの実線で示した部分が、米軍写真で読み取れる直線的施設。現在の高圧送電線と平行することに注意。

第3図 周辺の遺跡（国土地理院発行 25,000分の1図を改変）

前期の周溝墓は八幡遺跡・引間遺跡と豊岡後原遺跡（2）で検出された。中期には剣崎天神山古墳（12）、剣崎長瀬西古墳（6・5世紀後半）という大型円墳が築かれ、次いで5世紀後半～末葉には平塚古墳（19）が築造される。若田大塚古墳（9・6世紀初頭）や八幡二子塚古墳（18・6世紀代）、觀音塚古墳（17・6世紀末）の首長墓をはじめ、周辺には5～7世紀代の八幡・剣崎・若田原の各古墳群が展開する。剣崎稲荷塚遺跡（第3次）の西側隣接地には、「稻荷塚」地名の由来とも想像される塚が存在する。

古代集落では豊岡後原遺跡が最大規模である。八幡中原遺跡と七五三引遺跡は片岡郡衙に比定され、基壇状遺構・掘り込み地盤礎石建物や大溝が調査されている。東山道は、中山道とほぼ平行する牛堀・矢ノ原ルートと国府ルートの2条が想定されている。戦後の米軍写真では、若田支台を北東～南西方向に走行する地割り線を明瞭に視認でき、これを国府ルートと想定した場合、七五三引遺跡のすぐ東側を通過する。剣崎稲荷塚遺跡の1次調査では、9～11世紀代の住居跡13棟が調査されている。2号住居の覆土中及び床面付近からは、11世紀代の所産とされる2体の小金剛神像が出土している。中世の資料は乏しいが、八幡二子塚遺跡ではかわらけが出土した土坑や井戸が確認されている。上野国一社の八幡宮は源氏と関係が深く、八幡宮一帯は新田氏一族の所領でもある。また、八幡宮の立地する台地先端部は城砦的な微地形を備えている。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	概要	文献
1	剣崎稲荷塚遺跡 (第4次・本報告)	縄文時代前後住居跡1棟、平安時代住居跡1棟、奈良時代住居跡1棟、平安時代住居跡2棟（小糸道遺構）、古式柱立柱建物跡、10世紀代住居跡、中世柱立柱建物跡・土坑	『剣崎稲荷塚遺跡4』高崎市文化財調査報告書第373集 2016
1	剣崎後原遺跡 (第1次)	縄文時代前期・中期・後期住居跡、平安時代住居跡13棟、小金剛神像2体	『剣崎後原遺跡』高崎市遺跡調査会報告書第72集 1998
1	剣崎前原塚遺跡 (第2次)	縄文後期兼住居跡4棟、弥生後期住居跡2棟、古墳中期住居跡4棟、古墳後期住居跡17棟、奈良平成時代住居跡4棟	『剣崎前原塚遺跡2』高崎市文化財調査報告第248集 2008
1	剣崎前原塚遺跡 (第3次)	縄文中期住居跡5棟、11世紀代住居跡7基、弥生後期第六次遺構2棟、平安時代住居跡8棟、11世紀代住居跡、櫛谷谷底（縄文前期）	『剣崎前原塚遺跡3』高崎市文化財調査報告第292集 2012
2	豊岡後原遺跡	縄文時代中期住居跡1棟、方形網目石1基、奈良・平安時代住居跡109棟、経石垣、中世簡瓦窓	『豊岡後原I・II遺跡』高崎市文化財調査報告第107集 1998
3	引間遺跡	弥生時代後期住居跡3棟、弥生時代後期方形網目石、古墳時代前期～後期住居跡25棟、石垣跡	『引間遺跡』高崎市文化財調査報告書第5集 1979
4	剣崎天神山古墳	円頂形・舟形・圓形柱石墓1・2段形2・坦形1・横形1・舟形・手舟形1・圓形1・1刀子形71、1963年削減	川村和夫「石製複合品を出した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって」『考古学雑誌』62巻2号 1970
5	剣崎長瀬西古墳	縄文～奈良時代住居跡、石垣跡、古墳葬石坑、式系土器、金銀鏡、銅鏡印、輪馬具	『剣崎長瀬西古墳1』高崎市文化財調査報告第179集 2002
6	鉢田跡西古墳	帆立貝形土器、鉢形土器、沿石設置、鉄製鋤、鐵鎌、円筒埴輪、家形埴輪、須弥壇	『鉢田跡西古墳1』高崎市文化財調査報告第179集 2002
7	大山古墳遺跡	縄文時代住居跡3棟、古墳時代中期住居跡11棟、古墳7基	『高崎市史』資料編1 2000
8	ノゾミ木古墳	円頂形、前方式石室	『静岡県史』資料編3 1981
9	若田大塚古墳	円頂形（径29.5m）、自然石丸石積式石室、鍵棺	『静岡県史』資料編3 1981
10	若田原遺跡群	縄文時代前末住居跡1棟、竪穴式土器20種以上（柄縄形瓶・石臼・石棒）2棟	『高崎市史研究』3 1993
11	七五三引遺跡	古墳時代中期・後期住居跡7棟、土壤状遺構、式系土器	『七五三引遺跡』高崎市遺跡調査会報告書第6集 1984
12	八幡中原遺跡 (第3次)	古墳時代中期・奈良・平安時代石室・建物跡10棟、竪柱柱立柱建物跡2棟、基礎柱立柱1基、大型1基	『八幡中原遺跡3』高崎市文化財調査報告第282集 2011
12	八幡中根遺跡 (第5次)	古墳時代中期・後期石室・建物跡10棟、竪柱柱立柱建物跡1棟、筒形土器	『八幡中原遺跡5』高崎市文化財調査報告第328集 2014
13	八幡中原遺跡 (第1次)	縄文時代草創期有茎尖頭器、古墳時代～奈良・平安時代住居跡176棟、式系土器36種、式系土器	『八幡中原遺跡』高崎市文化財調査報告第31集 1982
14	八幡六枚塚遺跡	弥生～奈良・平安時代の住居跡、古墳時代石製模造品（片葉型）・鏡羽根型器皿	『八幡・六枚塚2』高崎市文化財調査報告第274集 2010
15	四ノ市遺跡	弥生～古墳時代の住居跡	『高崎市史』資料編2 1986
16	八幡遺跡	縄文時代前・後期土器片、草創期有茎尖頭器、弥生時代後期住居跡52棟、古墳時代住居跡43棟、式系土器、子持玉	『八幡遺跡』高崎市文化財調査報告書第91集 1989
17	觀音塚古墳	前方後円墳（周長66.9m）、横穴式石室、副室、大刀、琵琶、施鏡、馬頭、金剛、廻転、須弥壇等	『高崎市史』資料編3 1981
18	二子寺古墳	前方後円墳（周長66.5m）、横穴式石室	『八幡二子母古墳』高崎市遺跡調査会報告書第71集 1998
19	牛平古墳	前方後円墳（周長105m）、舟形石舟石、円錐埴輪	『高崎市史』資料編3 1981
20	觀音塚古墳	高立貝形土器（周長20m）、円錐埴輪	『高立貝形土器』1938
21	若田屋敷裏I・II遺跡	縄文時代住居跡1棟、古墳～平安時代住居跡27棟、竪立柱建物跡7棟	『若田屋敷裏I・II遺跡』高崎市文化財調査報告書第156集 1998

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区は宅地区画に囲まれた幅 4.5 m の道路部分と、南北既存生活道路の拡幅範囲、合わせて約 151 m² である。拡幅部分については、現況道路の封鎖および占有が困難であり、調査範囲内に電柱が設置されていることを勘案して、トレーナーを 3 ケ所設定して調査を実施した。結果、実質調査面積は 118.6 m² となった。

表土掘削は 0.45 m バックホーを用いておこなった。確認面はローム漸移層もしくは As - YP 層上面である。西側の剣崎稻荷塚遺跡 3 では、As - YP 層は厚く残存し、遺構確認面は As - YP より上位の漸移層であったが、本遺跡では As - YP が自然流失している可能性がある。As - B 混土あるいは As - A 混土が厚く堆積し、B 混土層とローム漸移層の間に黒褐色包含層がわずかに堆積しているが、遺構確認を容易にするため、ローム漸移層まで掘り下げてある。各遺構は重複関係や覆土の違いに留意しながら、移植ゴテ等を用いて人力掘削した。道路拡幅部分の調査については、生活道路でもある現道の通行を維持したまま実施する必要があったため、安全に十分配慮しつつ、現道際にトレーナーを 3 ケ所設定し、表土掘削・遺構調査・埋戻しを 1 日で完了した。SI - 03 の小鍛冶炉については、覆土のほぼ全てを回収し、整理作業の際に飾によって鍛造片や粒状滓を検出した。

遺構平面測量は自動追尾システム光波測距儀を用いて行い、断面測量は手実測した。遺構・遺物出土状況などの写真記録は、35mm モノクロネガ・カラーリバーサルで撮影し、1000 万画素相当のデジタルカメラを併用した。

2. 調査の経過

発掘調査は平成 27 年 9 月 1 日から同年 11 月 11 日まで実施した。以下に概要を記す。

9 月 1 日：調査準備開始、書類作成等、現地確認。 15 日：現地にて工事業者との打ち合わせ。

10 月 13 日：調査区設定。重機・仮設トイレ・器材搬入。重機による表土掘削開始。安全対策諸作業。

14 日：作業員による遺構確認作業。As - B 混土調査開始。隣接する剣崎稻荷塚遺跡 5 の重機掘削開始。

15 日：SI - 1 調査。各土坑・ピット調査。遺構平面測量。

16 日：東側道路拡張区の重機表土掘削ならびに調査。調査終了後、即日埋戻し。

19・20 日：SI - 1 および各土坑・ピットの調査。

22・24 日：SI - 1 および SK - 3・16・17 ほか、各土坑・ピットの調査。各遺構平面測量。

26・27 日：SI - 2・4、SK - 25 ほか、各土坑・ピットの調査。

28～30 日：SI - 2・4、SI - 1 挖り方および SI - 3 の調査。P - 121 ほか、各土坑・ピットの調査。

11 月 2 日：雨天中止。

3・4 日：SI - 1 挖り方および SI - 2・3、各土坑・ピットの調査。 5 日：空撮。

6・7 日：SI - 3 小鍛冶炉および掘り方調査。SI - 2 挖り方調査。縄文土坑群の調査。

9 日：縄文土坑群の調査。各遺構断面実測。 10 日：各遺構平面測量。縄文遺構群の空撮。

11 日：高崎市教育委員会による発掘調査終了確認検査。全調査工程終了。

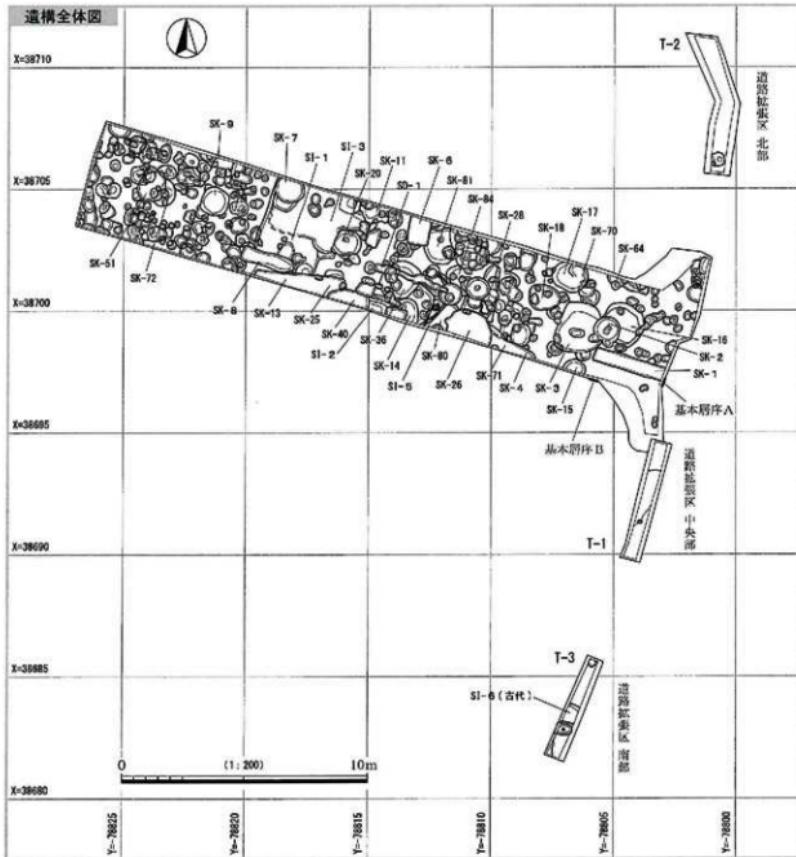
IV 基本層序 (第 4 図)

調査区東壁および SK - 1 壁面で確認した。表土耕作土・As - A 混土・As - B 混土が厚く、3 層で 50 ~ 60 cm を測る。III・IV 層は古代以前の遺物包含層にあたり、最大で 17 cm を測るもの、全体的には 5 ~ 10 cm 程度である。V 層はローム漸移層に該当し、層厚 5 cm 以下である。VI 層は As - YP 層に該当するが、剣崎稻荷塚遺跡 3 と比べて非常に薄く、安定しない。遺構確認面は、V 層上面～VI 層上面の間である。VII 層・VIII 層はいわゆるハードローム層で、VII 層中には φ 2 ~ 3 mm の白色軽石が含まれる。IX 層はやや軟弱で、粉状の微小白色軽石を微量含む。

基本層序



第4図 基本層序



第5図 遺構全体図 (1)

V 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

本遺跡は剣崎稻荷塚遺跡の第4次調査にあたり、西側隣接地の第5次調査は、本調査の直後に行われている。

今回の調査では、縄文時代前期の土坑群と柱穴列、中期の住居跡と土坑群、弥生時代と推測される焼土跡・ピット群古代の住居跡（小鍋治造構伴う）・掘立柱建物・墓坑・170基のピット、中近世の掘立柱建物・柱穴列・土坑群・61基のピットを確認した。本項では各時代の概要を中心にして個別遺構を概述し、各遺構の詳細な属性・情報については一覧表を参照されたい。

縄文時代

（前期の遺構） 東側に集中する。SK-3・16は前期中葉・有尾式期の土坑である。直径2m前後を測り、本来はフ拉斯コ状土坑であろう。諸磯b式期の豊穴住居と推定されるSI-5を確認した。浅い周溝が2重にめぐるため、豊穴には新旧がある。ピットからは深鉢破片が出土した。SI-5下部や周辺には、諸職式期の土坑10基（SK-36・77・79～86）が密集・重複して分布する。浅い土坑が多く、平面形は楕円形・略円形・隅丸方形など多様である。遺物量はわずかだが、隅丸方形の土坑は墓坑の可能性が残る。これらの土坑は覆土がローム層に近似するため、確認はやや難しい。SK-86からは有縁石皿片が出土している。この土坑群と重複して、柱穴列・SA-1が存在する。深いピット3基が3m間隔で並び、その間に浅いピット3基が位置し、計6基の柱穴が1.5m間隔でおよそ直線的に並ぶ。掘立柱建物や、いわゆるロングハウスの可能性もある。

（中期の遺構） SK-17・70、SK-71、SK-72、SK-75、P-121が中期の土坑である。平面円形のSK-72の覆土中位からは扁平自然縫が出土し、抱石葬の墓坑と推定する。伴出土器片は諸磯b式だが、覆土の特徴が他の前期後葉土坑とは異なる。P-121からは破碎した器台が出土し、1/3程度は欠損しているが、意図的に埋納された可能性もある。西壁のSK-75は一括埋戻し土坑である。SK-17・70は重複する土坑で、覆土の色調や土質が前期後葉の土坑とやや異なる。SI-7は西端部のピット群配置から推定した住居で、建替えを1回想定する。ピットはいずれも浅く、炉も不明はあるが、縄文集落において豊穴が不明瞭な住居は多数存在する。

（後期の遺構） SK-76からは後期前葉の堀之内1式と2式の小片が各1点出土した。長楕円形を呈することから、墓坑の可能性がある。平面形が類似するSK-78も、同時期の墓坑であった可能性を残しておく。SK-28・68・69はSK-76より新しいため、やはり後期であろう。

（遺物） 遺物量は少ない。前期中葉の有尾式と後葉の諸磯b式を主体とし、遺構外からは前期末葉の十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式、中期後葉の加曾利E式・郷土式、後期前葉の堀之内式などが出土している。石器類も少量で、石錐・スクレイバー・打製石斧・多孔石等がある。遺構外からは黒曜石製のチップ・リタッヂドフレイク・器種不明未製品も少量出土したが、掲載からは削愛した。焼跡が集積された古代ピット（P-155）からは、磨製石斧が出土している。古代の豊穴住居や土坑からは、何らかの用途で転用されたとみられる磨石などの礫石器が出土している。SK-27（弥生時代か）からは諸磯b式の顎面把手が出土した。

弥生時代

少量ながら、後期櫛式の土器片が出土している。該期の可能性のある遺構としては、SK-18・31・32、P-37・60・77・91・152・208・229が挙げられる。調査区東半～東端部にまとまる傾向にあり、東壁際で検出した焼土跡・SL-1は該期の遺構群に伴う可能性がある。掲載したSK-23（古代）出土遺物は、本来はSK-152に伴う土器であろう。

古代

（豊穴住居） 古代は本遺跡の主体時期となる。ほぼ同位置で重複するSI-1・3は、ともに10世紀前半の豊

穴住居あるいは工房で、連続的建替えを想定する。SI-3床面では新旧の小鍛冶炉2基が検出され、短い羽口が出土している。覆土を篠・水洗選別したところ、鍛造剥片や粒状滓・流動滓を検出した。炉の西側には、豊穴壁と接する大型土坑はSI-3の鍛冶炉に伴う施設と判断したが、SI-1まで継続利用された可能性もある。カマドは新旧2基あり、南側の旧カマドはSK-20によって破壊されている。燃焼部からは、硬化したAs-YPユニットの板状破片が数点出土し、補強材に利用していたらしい。旧カマドと接続する南壁は半円形に張出させて、カマド前の屋内空間を確保する。この張出直下には灰層等で埋め戻された床下土坑が存在する。新カマド前庭は灰層が厚く、両カマド前部の新床と旧床の間に最大5cmの灰層を挟み込む。貯藏穴は新カマドの北側に1基ある。

SI-1はSI-3の豊穴を全く踏襲しており、SI-3南側に豊穴を拡張し、カマド・貯藏穴部分を埋め戻すことによって、連続的に建替えた住居と考えられる。よって、SI-1床下土坑はSI-3の床面をほとんど破壊しない。土坑1は被熱した円錐が数点集積され、底面には灰層が溜まっていた。北壁直下にも灰層溜りがある。覆土の選別を行わなかったため鍛造剥片などは未検出ながら、これらも小鍛冶炉であった可能性を残しておきたい。豊穴覆土や床面からは、鉄鎌や鉄釘等が出土している。

SI-2はやや深い住居で、豊穴の一部しか調査できなかった。東側に深い床下土坑があり、その床面は沈下している。西側の床面の一部が盛り上がっていることも注意される。遺物はごくわずかながら、9世紀代と想定しておく。SI-4はSI-2より古く、円形状の土坑の可能性もあるが、土層断面5層が貼床・掘り方に相当する可能性があるため、豊穴状造構と推測する。SI-6は道路拡張区南部に位置する豊穴住居で、遺物が皆無なため時期不明であるが、9~10世紀代と予測しておく。

(掘立柱建物跡・ピット群) ピット・柱穴は調査区全面に展開し、土坑としたものはほぼ全て掘立柱建物の柱穴であった。ピットには明瞭な集中範囲があり、特に西側は密集するため、何度も建替えられたようである。数棟の掘立柱建物を想定し、SB-1~8を示した。SB-1・2は同一地点で建替えられており、SI-1・3よりも古い。SB-1・2・7の主軸はSI-2に近似し、構築時期も近い可能性がある。SB-3・8も主軸方位が近似し、同時期と推測する。ただしSI-1よりは新しい。

(墓坑) SK-25は10世紀後半の墓坑で、SI-2を破壊する。白歯が検出され、その周辺の軟弱な土壤を頭部範囲とした。白歯は脆弱で、ほぼ原形を留めていない。土坑は南北を主軸にし、埋葬状態は北向き仰臥伸展葬と推測する。灰釉陶器の段皿・碗と須恵器壺および砥石(縄文時代の砾石器の転用か)を副葬品とし、人体の直上や周辺と思われる位置から出土している。埋め戻し土はロームと暗褐色土の互層状を呈し、全体に強く締まる。

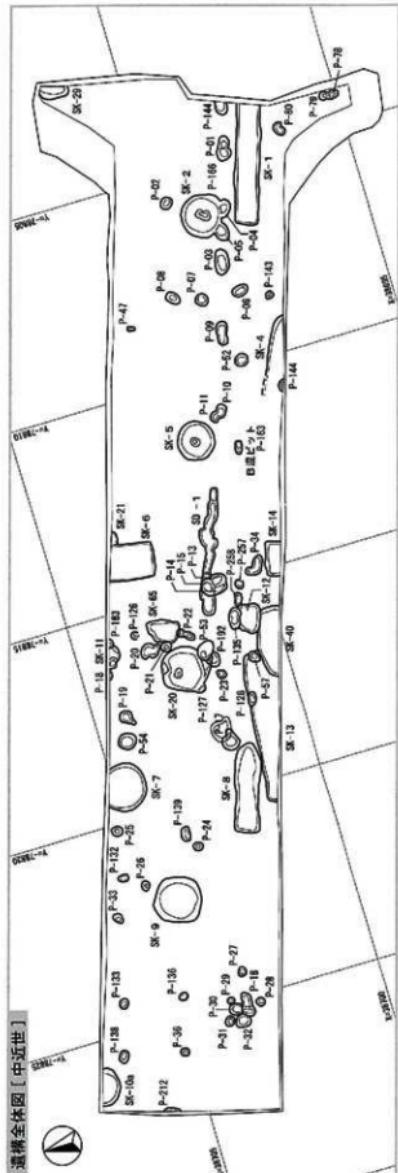
中世以降

土坑18基、掘立柱建物1棟、柱穴列2条、ピット61基(掘立・柱穴列含む)、溝状造構1条を確認した。

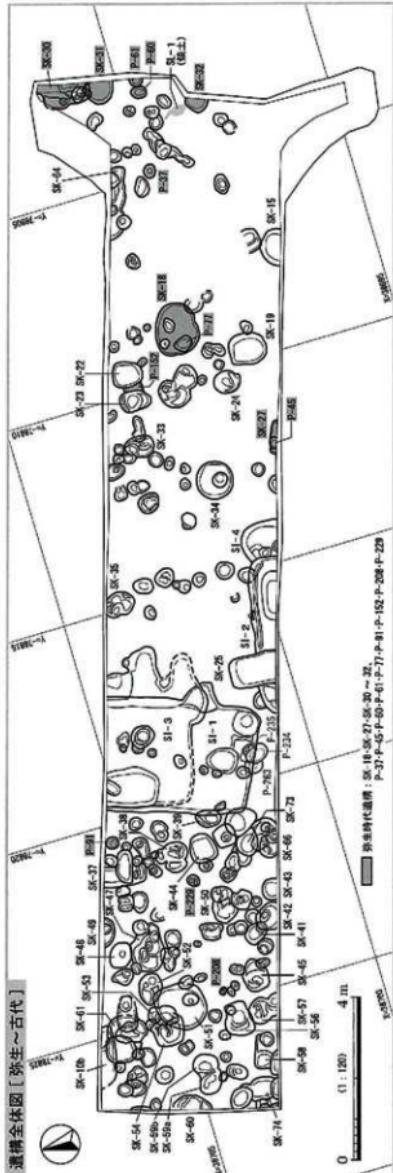
SK-2・5・9・20は直径90cm前後と1.1m前後の円形土坑群で、5.6m(約3間)間隔で直線上に整然と並ぶ。長々方形のSK-1とSA-1・2柱穴列およびSD-1は、土坑列の南縁に平行して構築されており、地割り境界線上での配置を示唆している。円形土坑は底面に小ピットを伴い、一括埋戻しであることが共通し、農作物の貯蔵穴と推測しておく。SK-7も類似土坑である。SK-1は一部が互層状に埋戻され、イモ穴のような施設と推測するが、円形土坑とは時期が異なるだろう。SA-1については、1.8m~2.0mの柱間で等間隔に並ぶため、掘立柱建物の北縁か権状施設のいずれかであろう。SD-1は柱穴列の布基礎と考えられる。掘立柱建物SB-9は梁間1間以上、桁行2間+西張出の小規模な建物と推測する。SA-1・2、SD-1、SB-9と円形土坑群は、同一線上で配置されていることや、主軸方位の相同意性から、同時期頃の所産と推定する。

SK-4・8・13・14・25は、やや軟弱なAs-B混覆土の浅い土坑である。南壁面では、古いAs-B混土包含層を切って構築されていることが判る。SK-8からは煙管が出土しており、土坑群の主軸方位は相同ではないが、おそらく18世紀中葉以前の土坑群であろう。SK-6はいわゆるイモ穴で、As-A・B混土である。

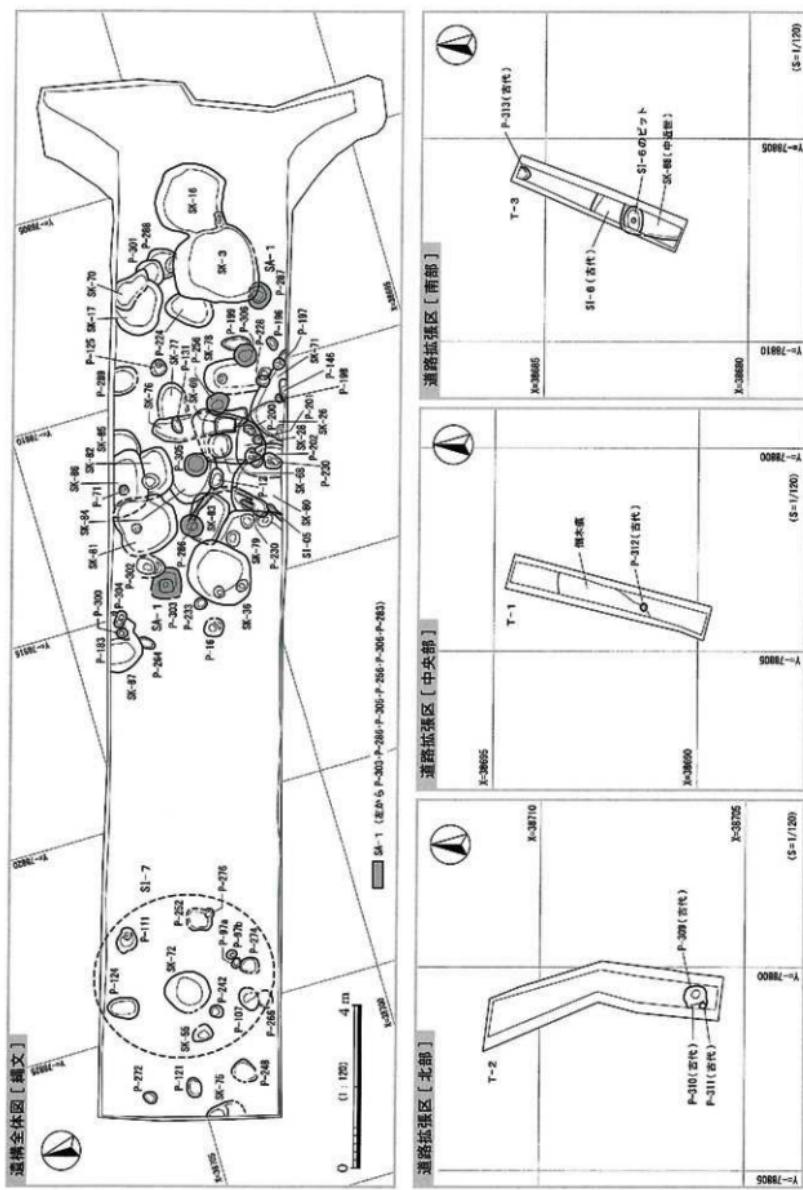
遺構全体図〔中近世〕



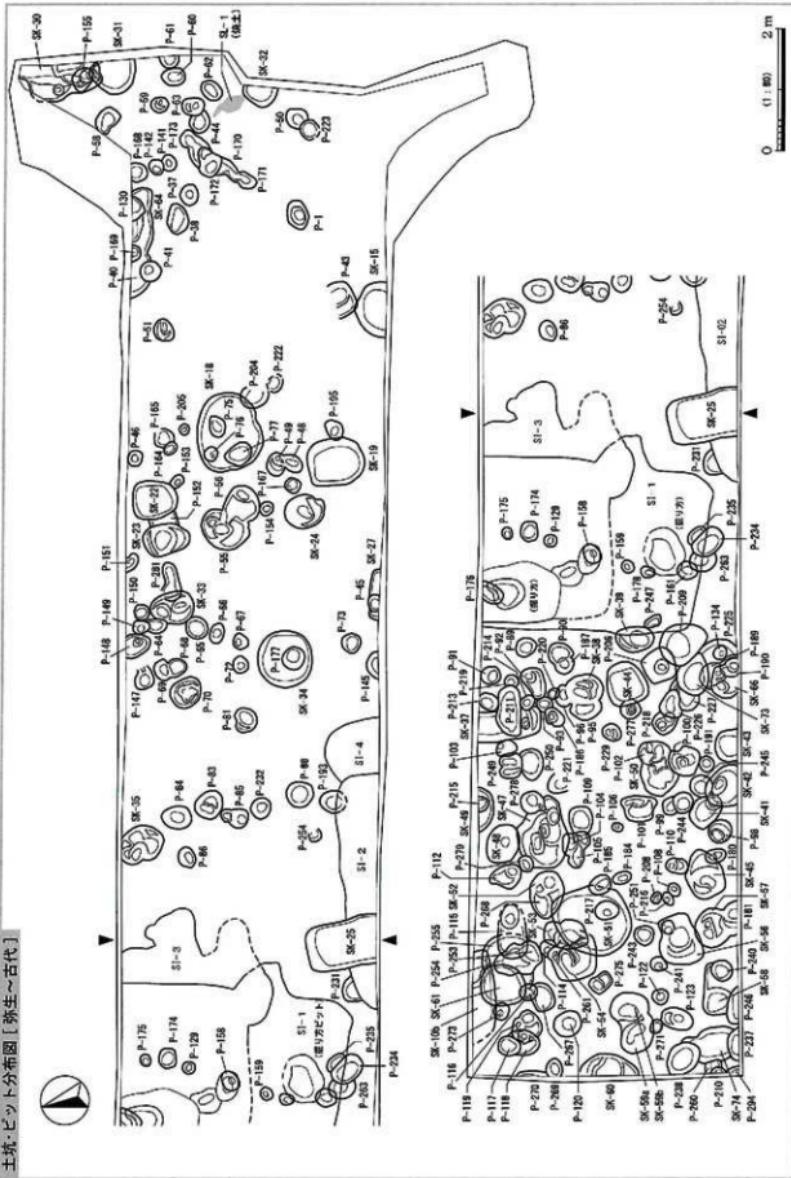
遺構全体図〔弥生～古代〕



第6図 遺構全体図(2) 時期別〔1〕



土坑・ビット分布図〔弥生～古代〕



第8図 遺構全体図(4) 土坑・ピット

第2表 住居跡・竪穴状遺構一覧表 [単位:m]

遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-1	N-109°-E (横長)	長方 形	(3.79) × 2.82 × 0.32	東駄	南東隅	南側の土坑1は灰層堆 積。被熱鉛敷石。炉か り窓。	暗褐色土主体。全体にしま り斑点。	10世紀 前半								
	出土 遺物															
須恵器壺・塙、灰陶器壺、羽釜、鍬鋤、鍬鋤か、砥石、SI-03をはじめとして、南側に試掘するように直徑・構造したものと推測。北壁隣床 石質基																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-2	N-100°-E (横丸)	横丸方形	3.95 × <0.71> × 0.76	区外東豊か	不明	深い床下土坑あり。	暗褐色土主体。東豊か。	9世紀後半								
	出土 遺物															
土師器壺・塙																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-3	N-104°-E (継長)	横丸長方形	3.30 × C2.00 × 0.44	東壁に2基。カ マド1の	カマド2の南側壁が張りだ す。直下に床下土坑。	カマド2の南側壁が張りだ す。直下に床下土坑。	暗褐色土主体。SI-1 が新しい。	10世紀 後半								
	出土 遺物															
須恵器壺・塙・甕、羽釜、羽口(完形・小型)、流動洋、土器中央に小船形印と羽口が並ぶ。小船形印は證元塗によって青色化。西壁の土 器3は證元に伴う道筋と推測。工房跡。																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-4	N-86°-W (丸方形)	横円形～圓 丸方形	<1.00> × <0.91> × 0.45	—	不明	底面に小ピット。	暗褐色土主体。	9世紀後半								
	出土 遺物															
土師器壺																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	炉	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-5	N-41°-E (横丸方形)	横丸方形	<1.93> × <1.37> × 深さ0.09	不明	—	P-23は竪穴に伴う小 ピット。埋設土器	—	證文前期後葉 織綴式期								
	出土 遺物															
P-230から證文上器漆跡 掘めて浅く、周囲のみ施設。竪穴不明。																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-6	N-112°-E (横丸長方形)	横丸長方形	<2.14> × <0.79> × 0.30	—	不明	床面中央に小ピット。	黒褐色土主体。	古代								
	出土 遺物															
土師器小片																
遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	炉	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期								
SI-7	N-15°-E (横円形)	横円形	(4.40) × (4.00) 深さ不明	不明	—	11	—	證文中期後葉 と推測								
	出土 遺物															
ピットから證文土器少版。																
竪穴不明。主柱穴6本以上、1回以上の建替えを想定する。																

第3表 堀立柱建物跡・柱穴列一覧表 [単位:m]

遺構名	主軸方位	平面形	柱方向	直径×高さ	平均柱間	面積	所見	時期
SB-1	N-88°-W	長方形	東西南	(3.12) × 6.07 1・2回×3回	柱行平均 2.027	(18.24) m ²	SB-2とは同一地点での建替え。SI-1・ 3があり古い。SI-2と同時期頃か	9~10世紀
SB-2	N-85°-W	長方形	東西南	3.40 × 6.13 2回×3回	柱行平均 2.087	(20.3) m ²	SB-1とは同一地点での建替え。SI-1・ 3があり古い。SI-3と同時期頃か	9~10世紀
SB-3	N-29°-E	長方形か (南北向)	—	2.72 × — 1間+下屋 × —	—	—	SB-8と主輪が近似。 SI-1より新しい。	10世紀以降
SB-4	N-79°-E	長方形か	東西南	<1.70> × <4.50> (2回) × (3回)	柱行平均 2.25	—	SB-5と同一地点での建替え。	古代
SB-5	N-85°-E	長方形か	東西南	(3.36) × 5.53 (2回) × 3回	柱行平均 1.872	(18.5) m ²	SB-4と同一地点での建替え。	古代
SB-6	N-90°	長方形	東西南	2.78 × 4.50 (1回) × (2回)	柱行平均 (2.25)	(12.5) m ²	SB-7との建替えを想定。	古代
SB-7	N-80°-W	長方形	東西南	2.66 × 4.78 (1回) × (2回)	柱行平均 2.28	(11.3) m ²	SB-6との建替えを想定。	古代
SB-8	N-30°-E	長方形	南東横	1.38 × <3.83> (1回) × <2>回	柱行平均 1.852	(5.3) m ²	建物の下屋部分のみか	10世紀以降
SB-9	N-74°-W	長方形	東西南	1.62 × 5.48 (2回) × (2回) 南+西下傾度	柱行平均 2.115 ≈ 9.68 ft	(17.1) m ²	建物の南側半分と推測。付属建物か。	中近世
SA-1	N-56°-W	—	東西	5.0m、 長さ7.44 m	1.505 m	—	深い柱穴3、深い柱穴3。大型柱穴建物主 柱穴の可能性あり。	證文前期後葉
SA-2	N-71°-W	—	東西	5.0m+側縫出 長さ9.78 m	1.944 m ≈ 6.41 ft	—	SA-3・SD-1と平行	中近世
SA-3	N-73°-W	—	東西	4.0m、 長さ8.00 m	1.998 m ≈ 6.594 ft	—	SA-2・SD-1と平行	中近世

第4表 土坑一覧表① [単位:m]

造構名	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	所見	時期	
SK-1	N - 74° -W	290 × 60	62	長々方形	箱形	近世陶器、須恵器等	柱穴と手行	中近世	
SK-2	N - 49° -W	110 × 101	48	不整方形	箱形	圓文土器、上師器、須恵器	SK 5・9・20と等間隔に並ぶ。	中近世	
SK-3	N - 61° -E	218 × (214)	58	不整指円形	箱形	圓文土器(有尾式等)、RF	プラスコ状土坑。	圓文前期中葉	
SK-4	—	<137> × <43>	8	梢円形	浅皿状			中近世	
SK-5	N - 54° -W	96 × 90	31	梢円形	逆台形	圓文土器	SK 2・9・20と等間隔に並ぶ。	中近世	
SK-6	—	<107> × 89	42	(長方形)	箱形	土師器、須恵器	ノモ穴状	中近世	
SK-7	—	<92> × 114	20	(円形)	箱形	弥生土器、上師器、須恵器		中近世	
SK-8	N - 74° -W	220 × 62	4	不整長方形	浅皿状	圓文土器、土師器、須恵器		近世	
SK-9	N - 30° -E	113 × 113	48	不整円形	箱形	圓文土器(諸種)、弥生土器	SK 2・5・20と等間隔に並ぶ。	中近世	
SK-10a	—	93 × <13>	17	(梢円形)	逆台形	圓文土器(中期後葉)、土師器		中近世	
SK-10b	—	<95> × <38>	13	(隅丸長方形)	逆台形			古代	
SK-11	—	<280> × <25>	15	不整形	逆台形			中近世	
SK-12	N - 77° -W	71 × (50)	9	不整長方形	浅皿状	圓文土器(加E3)、須恵器		中近世	
SK-13	—	<315> × <79>	4	(長方形)	(逆台形)	圓文土器(加E3)、須恵器		近世	
SK-14	—	C377 × 86	10	(長方形)	箱形	土師器、須恵器		中近世	
SK-15	—	<83> × <53>	7	(不整方形)	逆凸形	土師器		古代	
SK-16	N - 85° -W	171 × 166	44	不整方形	箱形	圓文土器(有尾等)	プラスコ状土坑。SK 3と重複。	圓文前期中葉	
SK-17	N - 53° -W	144 × <120>	27	不整指円形	逆台形	圓文土器(諸種b等)		圓文中期後葉	
SK-18	N - 83° -W	126 × 106	5	梢円形	浅皿状	圓文土器(牛頭拵業)、弥生土器	弥生時代後期	弥生時代後期	
SK-19	N - 5° -E	92 × 78	19	梢円形	椭状	圓文土器(中期後葉)、土師器		古代	
SK-20	N - 89° -E	126 × 114	46	不整指円形	椭状	土師器、羽釜	SK 2・5・9と等間隔に並ぶ。	中近世	
SK-21	—	<34> × <14>	9	(梢円形)	逆台形	圓文土器(崩崩)		中近世	
SK-22	N - 3° -E	72 × 63	8	不整長方形	浅皿状	圓文土器(中期後葉)、土師器		古代	
SK-23	N - 8° -E	76 × 51	46	梢円形	溜斗状	圓文土器(前期後葉)、土師器	柱穴	古代	
SK-24	N - 0° -W	65 × 55	33	梢円形	逆凸形	圓文土器	柱穴	古代	
SK-25	N - 4° -E	<114> × 81	52	長方形	箱形	圓錐品(須恵器、灰塗壇、段皿)		10世紀後半	
SK-26	—	195 × <116>	5	(円形)	浅皿状	圓文土器(諸種b)			
SK-27	N - 73° -W	85 × 7	6	(隅丸長方形)	逆台形	圓文土器(諸種b漆面把手等)	前田關係と南から弥生と推測	弥生時代後期	
SK-28	N - 29° -E	181 × 122	15	不整梢円形	浅皿状	圓文土器(諸種b)、石棒	SK76より新しく	圓文晩期	
SK-29	—	<67> × <32>	18	(不整長方形)	不整形		SK30を横す	中近世	
SK-30	N - 14° -E	<127> × <60>	30	(隅丸長方形)	不整形			弥生時代後期	
SK-31	N - 29° -W	<63> × 67	8	(梢円形)	浅皿状	牛牛突		弥生時代後期	
SK-32	—	<55> × <34>	11	(梢円形)	浅皿状	弥生土器	SL 1と接する。	弥生時代後期	
SK-33	N - 6° -E	71 × 54	27	梢円形	溜斗状	圓文土器(諸種b)	柱穴	古代	
SK-34	N - 32° -W	92 × 92	9	円形	浅皿状	圓文土器(諸種b)、灰塗陶器、磨石		古代	
SK-35	(N - 7° -W)	<71> × 58	57	梢円形	溜斗状	圓文土器(諸c、加E3)、土師器	柱穴	古代	
SK-36	N - 45° -E	165 × 139	36	隅丸長方形	椭状	圓文土器(諸b) RF、熟成内蔵		圓文	
SK-37	(N - 10° -E)	<102> × 60	37	長方形	逆台形	圓文土器(諸c、諸種b、骨器)	柱穴	古代	
SK-38	N - 5° -E	62 × 49	30	梢円形	椭状	圓文土器(中期後葉)、土師器	柱穴	古代	
SK-39	N - 20° -E	61 × 42	40	梢円形	逆台形	土師器、須恵器	柱穴	古代	
SK-40	N - 80° -W	192 × <76>	10	梢円形状	浅皿状			中近世	
SK-41	N - 31° -W	(55) × 44	45	梢円形	逆台形	圓文土器(中期)、土師器、須恵器	柱穴	古代	
SK-42	(N - 32° -W)	660 × 59	52	梢円形	椭状	圓文土器、須恵器	柱穴	古代	
SK-43	N - 6° -E	<36> × 51	28	(梢円形)	逆台形	圓文土器(中期後葉)、土師器	柱穴	古代	
SK-44	N - 81° -E	71 × 65	33	漏丸正方形	椭状	須恵器	柱穴	古代	
SK-45	N - 82° -E	80 × 60	33	梢円形	椭状	圓文土器(諸b、中期後葉器台)、土師器、須恵器	柱穴	古代	
SK-46	矢壺								
SK-47	N - 71° -W	119 × 86	45	梢円形	逆台形	圓文土器(諸c)、打斧、須恵器	柱穴	古代	
SK-48	N - 67° -W	82 × 52	45	梢円形	椭状	圓文土器(諸c、加E3)、須恵器	柱穴	古代	
SK-49	(P-215)	—	73 × <24>	10	(梢円形)	浅皿状	圓文土器(中期)、土師器	柱穴	古代
SK-50	N - 22° -E	T1 × (60)	54	(梢円形)	逆台形	圓文土器(加E2~E3)、須恵器	柱穴	古代	
SK-51	N - 32° -E	135 × (111)	15	梢円形	逆台形	須恵器		古代	
SK-52	N - 74° -W	<39> × 56	50	梢円形	溜斗状	圓文土器(有尾、諸a、諸b)	柱穴	古代	
SK-53	N - 20° -E	70 × 48	44	不整梢円形	逆台形	圓文土器(中期後葉)、須恵器	柱穴	古代	
SK-54	N - 45° -W	(88) × (72)	48	不整方形	椭状	瓦頭・牛頭、土師器	柱穴	古代	
SK-55	N - 5° -E	50 × (39)	18	梢円形	逆台形	小片	SI-7柱穴	圓文中期後葉	

第5表 土坑一覧表② [単位: m]

遺構名	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	所見	時期
SK-56	N-81°-E	88×88	70	不整長方形	逆台形	圓文土器(中期後葉)、弥生土器、須恵器	柱穴	古代
SK-57	N-10°-W	<71>×63	35	不整形	掩状	土師器	柱穴	古代
SK-58	(N-76°-W)	660×420	2	丸長方形	箱形	圓文土器(加E3)、土師器	柱穴	古代
SK-59a	N-32°-W	69×47	24	(梢円形)	掩状	圓文土器(加E3-4)、須恵器		古代
SK-59b	N-12°-E	61×46	26	(梢円形)	掩状			古代
SK-60	-	<87>×C36	20	(梢円形)	逆台形	圓文(縦a-b、加E3)、土師器	柱穴	古代、西壁
SK-61	N-51-E	77×70	12	梢円形	箱形	圓文土器(加E3)、土師器		古代、西北隅
SK-62	欠番							
SK-63	欠番							
SK-64	N-67°-W	90×C34	22	(梢丸長方形)	浅皿状	土師器、須恵器		古代、北東壁
SK-65	N-32°-E	83×55	5	不整形	浅皿状			中近世
SK-66	N-43°-W	C37×C39	43	(梢円形)	箱形		柱穴	古代、南壁
SK-67	欠番							
SK-68	N-71°-W	57×(57)	11	梢円形	浅皿状		SK76より新しい	圓文後期
SK-69	N-15°-E	61×39	8	長方形	浅皿状		SK76より新しい	圓文後期
SK-70	N-29°-W	114×71	25	(梢円形)	逆台形			圓文中期後葉
SK-71	N-66°-W	C280×C83	17	(長梢円形)	浅皿状	圓文土器(諸般a、加E4)		圓文中期後葉
SK-72	N-71°-E	<82>×103	58	梢円形	箱形	圓文土器(諸般b、諸般c)、屬平自然円錐(捨石錐)	墓杭と推測	圓文中期後葉
SK-73	N-59°-W	69×52	47	梢円形	逆台形		柱穴	古代
SK-74	(N-8°-E)	<47>×55	20	(不整梢円形)	逆台形	圓文土器	柱穴	古代、西壁
SK-75	N-7°-W	C61×C37	1	(梢円形)	逆台形	圓文土器(諸般c、加E3)		圓文中期後葉
SK-76	N-7°-E	234×64	14	長梢円形	浅皿状	圓文土器(諸般b、側1、側2)	墓杭と推測	圓文後期前葉
SK-77	N-84°-W	<69>×(62)	18	(梢円形)	浅皿状	黒褐色チップ		圓文前後後葉
SK-78	N-11°-E	<136>×<75>	8	(梢円形)	浅皿状	剝片、R.F.、黒褐色チップ	墓杭と推測	圓文後期前葉
SK-79	-	<72>×<107>	13	(梢丸形)	浅皿状	黒褐色石片		圓文前期後葉
SK-80	-	<197>×<136>	12	(梢丸形)	浅皿状	圓文土器(諸般b)、片		圓文前期後葉
SK-81	N-50°-E	(161)×147	46	不整梢円形	逆台形	圓文土器(諸般b、諸般c)、圓錐、黒褐色石		圓文前後後葉
SK-82	N-14°-W	<69>×(117)	25	(梢円形)		圓文土器(黑色、諸般b)、石錐		圓文前後後葉
SK-83	N-53°-W	123×90	15	丸長方形	浅皿状	圓文土器(諸般c)		圓文前後後葉
SK-84	-	<95>×(92)	19	(梢円形)	浅皿状	圓文土器(深系か)		圓文前後後葉
SK-85	-	<63>×(60)	15	(円形)	浅皿状	圓文土器(深系)		圓文前後後葉
SK-86	-	152×(64)	24	(梢円形)	浅皿状	圓文土器(有尾、諸般b)、有縫石錐		圓文前後後葉
SK-87	-	149×(78)	38	(不整梢円形)		P-300を含む		圓文前後後葉

第6表 ピット一覧表① [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-01	60×34	19	不整形		中近世
P-02	31×27	11	梢円形		中近世
P-03	60×34	25	梢円形	圓文(前葉中葉)	中近世
P-04	<20>×37	25	(梢円形)		中近世
P-05	<38>×34	25	(梢円形)		中近世
P-06	46×27	14	梢円形		中近世
P-07	32×29	15	円形		中近世
P-08	37×24	10	梢円形		中近世
P-09	69×32	12	不整梢円形	圓文(崩葉後葉)	中近世
P-10	C35×23	11	(梢丸長方形)		中近世
P-11	<19>×25	7	(梢円形)		中近世
P-12	48×35		梢円形		中近世
P-13	<34>×<25>	24	(梢円形)		中近世
P-14	C33×C20	16	(梢円形)		中近世
P-15	44×31	30	梢円形		中近世
P-16	47×43	31	梢円形	圓文(中期後葉)、 須恵器、銅鏡	中近世
P-17	52×43	23	不整形	土師器	中近世
P-18	58×31	5	不整梢円形		中近世
P-19	44×32	7	不整梢円形	土師器	中近世
P-20	46×34	10	不整形		中近世
P-21	27×24	6	不整方形		中近世
P-22	45×17	6	梢円形	2基重複	中近世
P-23	23×20	5	梢円形		中近世
P-24	24×20	5	梢円形	圓文不明	中近世
遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-25	26×23	10	円形		中近世
P-26	23×20	6	梢円形		中近世
P-27	23×19	4	梢円形		中近世
P-28	21×21	1	方形		中近世
P-29	18×15	5	梢円形		中近世
P-30	C31×28	4	(梢円形)		中近世
P-31	24×21	11	梢円形		中近世
P-32	38×33	5	梢円形	土師器	中近世
P-33	27×20	10	梢円形		中近世
P-34	55×27	5	不整形		中近世
P-35	欠番		梢円形		
P-36	21×21	5	円形		中近世
P-37	34×29	26	不整円形	弥生土器、桂木	弥生世
P-38	45×34	8	梢円形	圓文(加E4)、 弥生土器、須恵器	古代
P-39	欠番				
P-40	<14>×<19>	9	(梢円形)	土師器	古代
P-41	33×33	12	円形		古代
P-42	<32>×27	24	不整円形	圓文土器(諸般c)	圓文
P-43	57×(44)	30	梢丸形		古代
P-44	C29×34	6	(梢円形)		古代
P-45	<18>×28	35	(梢円形)	弥生土器、桂木	弥生世
P-46	25×22	12	方形	圓文土器(前期中葉)、 弥生土器	圓文(前期中葉)、 古代
P-47	19×11	3	梢円形		中近世

第7表 ピット一覧表②【単位: m】

遺物名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-48 24 × 22	18	(指円形)	柱底	古代	
P-49 38 × 27	12	(指円形)		古代	
P-50 30×34	19	(指円形)		古代	
P-51 36 × 34	12	指円形	黒曜石剝片	古代	
P-52 32 × 31	13	方形		中近世	
P-53 50 × 36	33	指円形		中近世	
P-54 45 × 41	6	指円形		中近世	
P-55 78 × <57	37	(指円形)	圓文土器(縫隙c)、土師器	古代	
P-56 <53 × 56	12	(指円形)	圓文不明、磨・圓・磨石	古代	
P-57 27 × 24	11	指円形		中近世	
P-58 <23 × 30	22	(不整指円形)	圓文土器(縫隙b)	古代	
P-59 <20 × 32	22	(不整指円形)		古代	
P-59 28 × 25	25	指円形	柱底	古代	
P-60 38 × 28	15	指円形	威然縄	弥生e	
P-61 <19 × 32	3	(円形)	弥生上層	弥生e	
P-62 38 × 28	4	指円形		古代	
P-63 36 × 29	38	指円形	柱底	古代	
P-64 <28 × 23	15	(指円形)	柱底	古代	
P-65 37 × 35	8	円形		古代	
P-66 33 × 22	13以上	指円形	圓文土器	古代	
P-67 25 × 24	8以上	不整円形		古代	
P-68 <26 × 29	19	(指円形)		古代	
P-69 34 × <24	21以上	(指円形)	圓文(前後底)	古代	
P-70 54 × 46	34	指円形	圓文不明、波旋縄	古代	
P-71 27 × (22)	19	円形	圓文		
P-72 28 × 24	22	不整円形	圓文土器(縫隙c)	古代	
P-73 32 × 30	6	指円形	圓文土器(中期後葉)	古代	
P-74 欠番					
P-75 36 × 26	9	指円形	柱抜取	古代	
P-76 24 × 23	22	方形	柱底	古代	
P-77 45 × 36	12	指円形	圓文土器(加E4)	弥生e	
P-78 <23 × 20	6	(指円形)		中近世	
P-79 <24 × 21	5	(指円形)		中近世	
P-80 34 × 24	4	不整指円形		中近世	
P-81 39 × 38	50	不整指円形	圓文土器(加E3)、土師器、柱底	古代	
P-82 欠番					
P-83 49 × 42	28	指円形	圓文土器(中期後葉)、須恵器	古代、柱底	
P-84 49 × 37	25	指円形	土師器	古代	
P-85 46 × 32	30以上	不整指円形		古代	
P-86 35 × 27 (30)	指円形	圓文土器(細E3)	古代		
P-87 欠番					
P-88 45 × 43	20	不整円形	圓文(縫隙c、中期後葉)、土師器	古代	
P-89 35 × 29	15	指円形		古代	
P-90 31 × <27	21	(円形)	圓文(中期後葉)、柱底	古代	
P-91 31 × 30	10以上	円形	弥生土器	弥生e	
P-92 51 × 36	不整指円形		古代		
P-93 26 × 25	指円形	圓文不明、柱底	古代		
P-94 34 × 24	22	指円形	圓文(前後底)、中肩削輪溝、土師器、須恵器	186±四一分	
P-95 51 × <25	18	(指円形)	圓文、須恵器、柱底	古代	
P-96 36 × <18	20	(指円形)	圓文土器、土師器、須恵器	古代	
P-97a 25 × 20	16	略円形	SI-7	圓文	
P-97b 25 × 21	34	略円形	SI-7	圓文	
P-98 39 × 36	33	円形	圓文不明、土師器	古代	
P-99 <21 × 26	(指円形)	柱底	古代		
P-100 51 × 49	30	不整形	圓文土器(中期後葉)、土師器、柱底	古代、	
P-101 58 × 42	15	不整方	圓文土器(中期後葉)、生底	古代	
遺物名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-102 (SK50)	(60 × 51)	70	圓丸方形	圓文(中期後葉)、土師器、柱底	古代
P-103	33 × 22	37	指円形		古代
P-104a <36 × <23	9	(圓丸長方形)		古代	
P-104b <26 × <19	9	(指円形)		古代	
P-105 <32 × <24	9	(指円形)	圓文土器(中期後葉)、土師器	古代	
P-106	18 × 13	11	略円形		古代
P-107	58 × <26	22	(指円形)	圓文土器(中期) SI-7	圓文
P-108	23 × 18	10	円形	柱底	古代
P-109 <46 × 38	12	指円形		古代	
P-110	37 × 24	13	指円形		古代
P-111 <62 × 48	18	(指円形)	SI-7	圓文	
P-112	45 × 39	17	不整指円形		古代
P-113 欠番					
P-114 <23 × <12	24	(指円形)		古代	
P-115 688 × 48	25	(指円形)	圓文土器(加E3)、土師器	古代	
P-116 29 × 26	29	円形		古代	
P-117 36 × 30	10	指円形	土師器	古代	
P-118 <32 × 41	27	(指円形)	圓文土器(縫隙c)	古代	
P-119 (50) × 48	30	不整形	圓文不明、柱底	古代	
P-120 45 × 40	15以上	指円形	圓文不明、土師器、柱底	古代	
P-121 48 × 35	15	指円形	圓文土器(中期後葉)、十三善器	圓文	
P-122 28 × 25	28	略円形	柱底	古代	
P-123 51 × 33	20	指円形	圓文土器(前期縫隙c)、土師器、里堀石RF、柱底	古代	
P-124a 76 × 51	17	指円形	加E3、石獅 SI-7	圓文	
P-124b (30) × (20)	(17)	(円形)	弥生上層、須恵器	古代	
P-125 42 × 38	23	不整方形	不明土器	圓文	
P-126 56 × 25	6	不整指円形		中近世	
P-127 26 × <14	(16)	(指円形)		中近世	
P-128 34 × 19	14	指円形		中近世	
P-129 20 × 29	35	円形		中近世	
P-130 <18 × 37	35	(指円形)		古代	
P-131 41 × 21	15	指円形	SK76より古e	圓文	
P-132 25 × 18	7	指円形	刻片	中近世	
P-133 23 × 23	6	指円形	須恵器	中近世	
P-134 24 × 19	30	指円形	圓文土器(前期中)、弥生土器	古代	
P-135 54 × 27	15	不整指円形		中近世	
P-136 22 × 19	5	指円形	圓文不明、不明上層	中近世	
P-137 20 × 20	14	小窓方形	土師器、墨堀石	古代	
P-138 36 × 22	8	圓丸長方形	圓文土器(縫隙b)、土師器	中近世	
P-139 35 × 23	10	指円形		中近世	
P-140 23 × <6	8	(指円形)		中近世	
P-141 <21 × 26	5	(指円形)	土師器	古代	
P-142 25 × 24	22	円形	土師器、卑石	古代	
P-143 19 × 17	7	指円形		中近世	
P-144 <33 × 29	16	(指円形)	土師器	中近世	
P-145 <20 × <27	16	(指円形)	圓文土器(縫隙b)、古代		
P-146 50 × <15	6	(圓丸長方形)	圓文土器(縫隙b)	古代	
P-147 54 × 31	21	不整指円形	圓文土器(縫隙b)	古代	
P-148 <41 × 38	10以上	(指円形)		古代	
P-149 27 × 21	9	指円形		古代	
P-150 26 × 24	17	指円形		古代	
P-151 <25 × 21	7	(不整指円形)		古代	
P-152		8	弥生土器	弥生e	
P-153	24 × 17	21	圓丸長方形		古代
P-154 24 × 22	10	指円形		古代	
P-155 38 × 30	29	指円形	範釋、磨石	古代	
P-156 82 × 52	28	指円形	SI-1を切る	古代	

第8表 ピット一覧表③ [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-157	41×32	13	(楕円形)		古代
P-158	34×24	19	楕円形		古代
P-159	21×19	14	楕円形		古代
P-160	欠番				
P-161	—	13	(円形)	SI-1 断面のみ	古代
P-162	45×32	35	(楕円形)	氣泡質、羽垂 SI-1に切られる	古代
P-163	32×17	9	楕円形		中世
P-164	22×18	19	楕円形		古代
P-165	32×27	12	(不規方形)		古代
P-166	欠番				
P-167	33×25	7	円形		古代
P-168	27×30	14	(楕円形)		古代
P-169	14×27	9	(楕円形)		古代
P-170	23×28	7	不整形		古代
P-171	43×23	10	不整形		古代
P-172	46×39	56	不整楕円形	浮生上器	古代
P-173	39×34	7	不整形		古代
P-174	33×30	8	楕円形		古代
P-175	20×15	15	略円形	SI-1を切る	古代
P-176	37×20	14	(楕円形)	圓文土器、氣泡質	古代
P-177	37×34	26	方盤	土師器	古代
P-178	23×18	6	楕円形	柱頭	古代
P-179	欠番				
P-180	34×22	30	楕円形	土師器、須恵器 柱頭	古代
P-181	20×34	40	(楕円形)		古代
P-182	27×16	8	(楕円形)		調文
P-183	22×9	9	(楕円形)		調文
P-184	36×19	10	楕円形	圓文(蓮瓣文)	古代
P-185	36×30	21	楕円形		古代
P-186	35×26	22	楕円形	圓文土器(蓮瓣)	古代
P-187	41×28	12	(楕円形)		古代
P-188	36×37	40	(楕円形)	圓文(蓮瓣)、中 期後葉)、土師器、黑 曜石鋸歯車	古代
P-188・ 189	—	—	—	—	—
P-189	68×50	47	楕円形	土師器、須恵器 柱頭	古代
P-190	30×33	43	(楕円形)	柱頭	古代
P-191	25×24	16	円形		古代
P-192	欠番				
P-193	42×37	29	(楕円形)	圓文土器(蓮瓣)、 柱頭、土師器	古代
P-194	50×34	53	楕円形		古代
P-195	33×27	35以上	楕円形	柱頭	古代
P-196	33×22	9	楕円形		調文
P-197	30×26	14	略円形	柱頭	調文
P-198	21×17	13	楕円形		調文
P-199	65×27	14	長楕円形		調文
P-200	30×19	10	不整楕円形		調文
P-201	23×22	13	不整円形		調文
P-202	49×37	8	不整形		調文
P-203	48×36	13	不整形		調文
P-204	28×39	17	(楕円形)		調文
P-205	19×19	20	円形		古代
P-206	59×58	60	圓丸方盤	浮生土器、黑曜 石鋸歯、柱頭	古代
P-207	欠番				
P-208	19×15	15	楕円形	圓文土器(中期 後葉)、浮生土器 斧生土器	古代
P-209	79×65	50	楕円形	圓文(蓮瓣)、中 期後葉)、須恵器	古代
P-210	39×24	17	(楕円形)	圓文土器(中期 後葉)、土師器	古代
P-211	62×39	51	長楕円形		古代
P-212	41×9	22	(楕円形)	圓文土器(加E3) 中近畿	古代
P-213	32×25	15	(楕円形)		古代
P-214	24×21	24	楕円形		古代
P-215	18×23	19	(楕円形)		古代

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-216	21×16	21	楕円形	圓文土器(加E3) 土師器、柱頭	古代
P-217	38×30	32	楕円形		古代
P-218	20×35	52/53	(楕円形)	上師器、柱頭	古代
P-219	28×27	14	円形	P-211より古い	古代
P-220	21×17	26	楕円形		古代
P-221	30×36	22	楕円形		古代
P-222	26×24	12	楕円形	圓文(十二菩提)	古代
P-223	33×24	12	楕円形		古代
P-224	60×36	29	(圓丸長方形)		古代
P-225	65×36	4	(楕円形)		古代
P-226	45×37	40	不整楕円形		古代
P-227	27×50	41	(楕円形)		古代
P-228	32×26	7	楕円形	圓文	
P-229	31×26	45	楕円形	圓文土器(黒底)、 浮生土器	弥生
P-230	50×38	5	不整方形	圓文土器(諸般)	圓文
P-231	23×41	19	(楕円形)		古代
P-232	34×32	32	楕円形	須恵器	古代
P-233	32×27	30	楕円形	圓文不明	圓文
P-234	55×37	28	楕円形	圓文土器(後期)	古代
P-235	36×14	11	(不整楕円形)	羽釜	古代
P-236	欠番				
P-237	53×17	18	(楕円形)		古代
P-238	61×47	40	楕円形	圓文土器(加E 3)、須恵器	古代
P-239	欠番				
P-240	34×31	14	不整方形	柱頭	古代
P-241	27×24	41	不整方形	土師器、柱頭	古代
P-242	33×32	17	楕円形	圓文土器(諸般)、 黒曜石チップ、SI-7	圓文
P-243	31×30	23	円形	柱頭	古代
P-244	33×33	31	円形		古代
P-245	37×36	6	(円形)		古代
P-246	60×18	28	(楕円形)	圓文土器(諸般)、 須恵器	古代
P-247	27×18	33	楕円形	SI-1側方位	古代
P-248	61×45	7	不整圓形	圓文土器(諸般)、 中期後葉	圓文
P-249	37×37	30	不整形	羽釜 P-103より古い	古代
P-250	51×39	13	楕円形	圓文土器(諸土)、 土師器	古代
P-251	22×30	55	円形		古代
P-252	33×51	12	(不整方形)	SI-7	圓文
P-253	43×33	31	(楕円形)	柱頭	古代
P-254	45×52	13	不整形		古代
P-255	50×74	13	(楕円形)	圓文(中期後葉)	古代
P-256	58×50	59	楕円形	圓文土器(諸土)	圓文
P-257	23×19	10	(楕円形)	土師器	中近畿
P-258	30×17	8	楕円形	圓文不明	中近畿
P-259	51×33	13	楕円形		古代
P-260	12×27	13	(楕円形)		古代
P-261	27×18	24	(円形)		古代
P-262	欠番				
P-263	P-162と同一				古代
P-264	42×24	10	楕円形	圓文土器(前期 中期)、中層(暗窓)	圓文
P-265	欠番				
P-266	33×30	7	不明	圓文(諸b、有尾) SI-7	圓文
P-267	47×36	12	圓丸長方形	圓文(諸c、加E3)	
P-268	76×55	33/25/	(楕円形)	3号重複カ	圓文
P-269	29×26	12	楕円形	黒曜石チップ	古代
P-270	51×5	11	(楕円形)		古代
P-271	23×18	23	楕円形	圓文(加E3)、 底面に径21cmの 黒板幅半径	古代

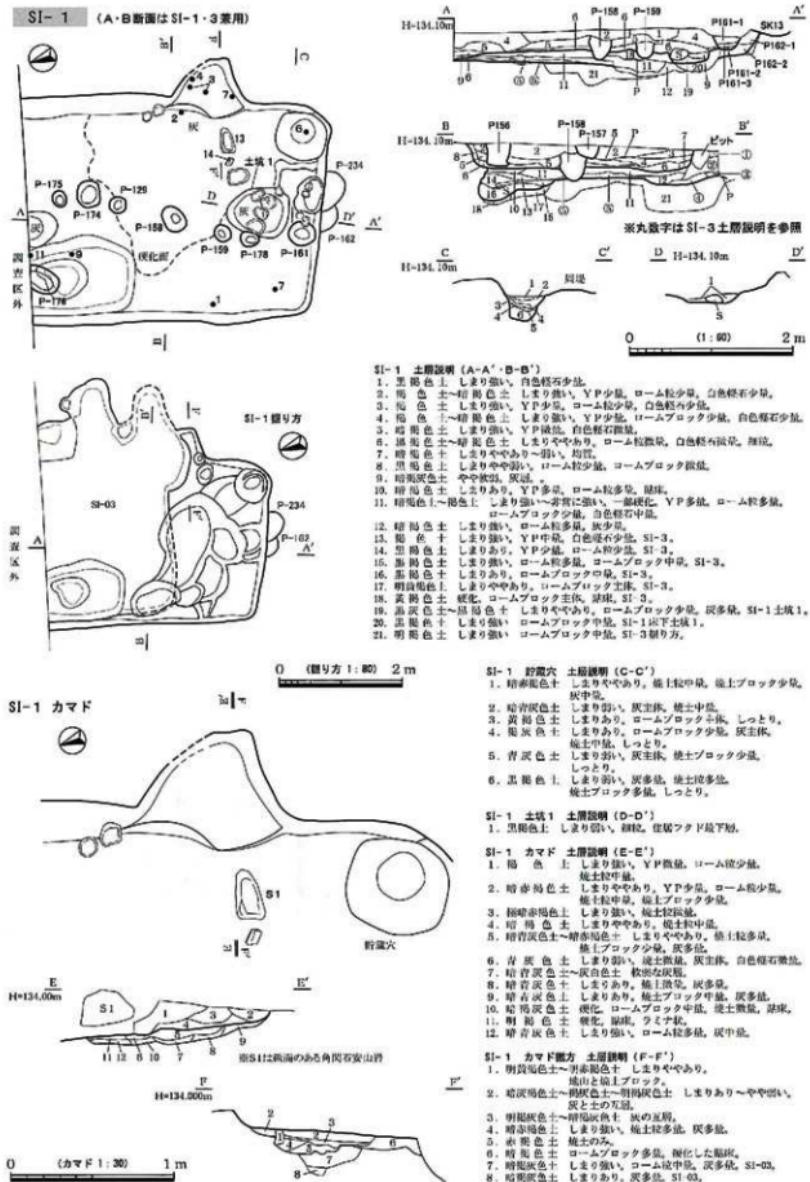
第9表 ピット一覧表④ [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-272	34 × 28	15	楕円形	縄文土器(諸c、中期後期)	縄文
P-273	28 × 24	20	不整円形		古代
P-274	46 × (38)	8	不整長方形	加E4、十郎器	縄文
P-275	36 × 28	13	圓丸長方形		古代
P-276	(25) × 23	11	(楕円形)	SI-7	縄文
P-277	33 × (31)	20	(円形)	縄文(前期中期、諸假b)、柱底	古代
P-278	44 × 36	25	不整形	縄文土器(諸假b)	古代
P-279	27 × 21	29	楕円形		古代
P-280	欠番				
P-281	63 × (31)	11	不整楕円形	縄文土器(諸b)、不明土器	古代
P-282	欠番				
P-283	欠番				
P-284	欠番				
P-285	欠番				
P-286	55 × 53	6	円形	不明土器、多孔石	縄文
P-287	62 × (56)	68	(楕円形)	縄文土器(諸假b)	縄文
P-288	<46> × 72	13	(楕円形)		縄文
P-289	<59> × 66	11	(楕円形)		縄文
P-290	欠番				
P-291	欠番				
P-292	欠番				

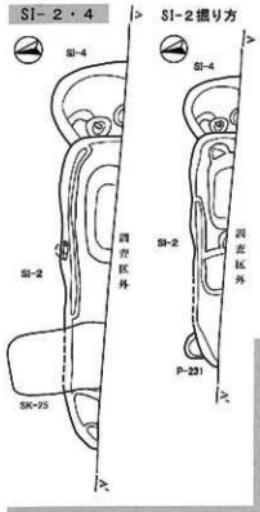
遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-293	欠番				
P-294	<20> × <10>	12	(楕円形)		古代
P-295	欠番				
P-296	欠番				
P-297	欠番				
P-298	欠番				
P-299	欠番				
P-301	28 × 23	(60)	楕円形	縄文土器(諸b)、 被熱した角灰石 安山岩(人頭大) SK-87と重複	縄文
P-301	(70) × 69	25	(楕円形)		縄文
P-302	<68> × <47>	72	(楕円形)		縄文
P-303	76 × 72	51	(圓丸方形)		縄文
P-304	43 × 24	29	楕円形	加E3	縄文
P-305	60 × 54	23	円形		縄文
P-306	54 × 54	33	円形		縄文
P-307	欠番				
P-308	32 × 17	9	楕円形		中近世
P-309	32 × 17	9	楕円形	道路駆築区	古代
P-310	32 × 17	9	楕円形	道路駆築区	古代
P-311	32 × 17	9	楕円形	道路駆築区	古代
P-312	32 × 17	9	楕円形	道路駆築区	古代
P-313	32 × 17	9	楕円形	道路駆築区	古代

第10表 溝跡一覧表 [単位: m]

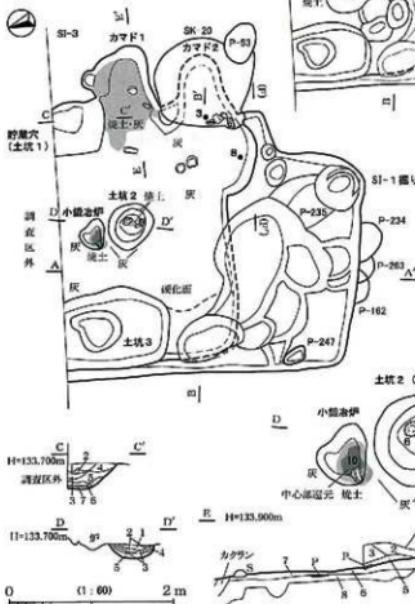
遺構名	走向方位	上端幅×下端幅	深さ	断面形	遺物	所見・時期
SD-01	N-71° -W	24 × 14	19	箱形	なし	中近世



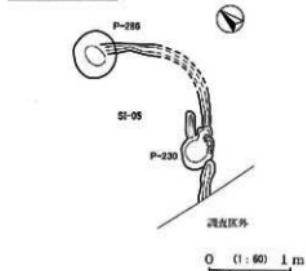
第9圖 透構圖(1) SI-1



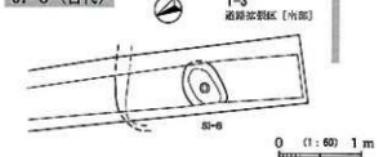
SI-3
(A・B断面はSI-1と兼用)



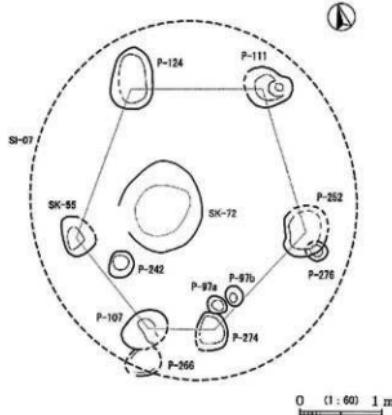
SI-5 (縄文)



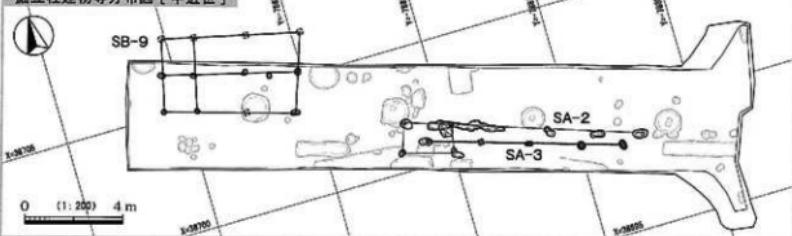
SI-6 (古代)



SI-7 (縄文)



掘立柱建物等分布図 [中近世]



SA-2



SA-3



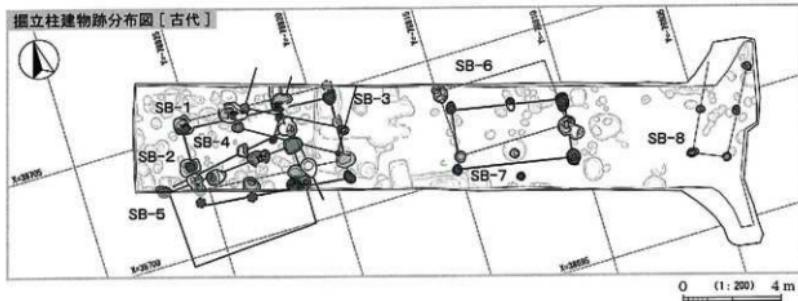
SA-2
東西約4m, N-71°W。
柱間5間+西隅柱出
足3.978m。
平均柱間1.984m±6.41尺。
平均柱幅1.3m。

SA-3
東西約3m, N-73°W。
柱間4間+西隅柱出
足3.978m。
平均柱間1.998m±6.694尺。
平均柱幅1.3m。

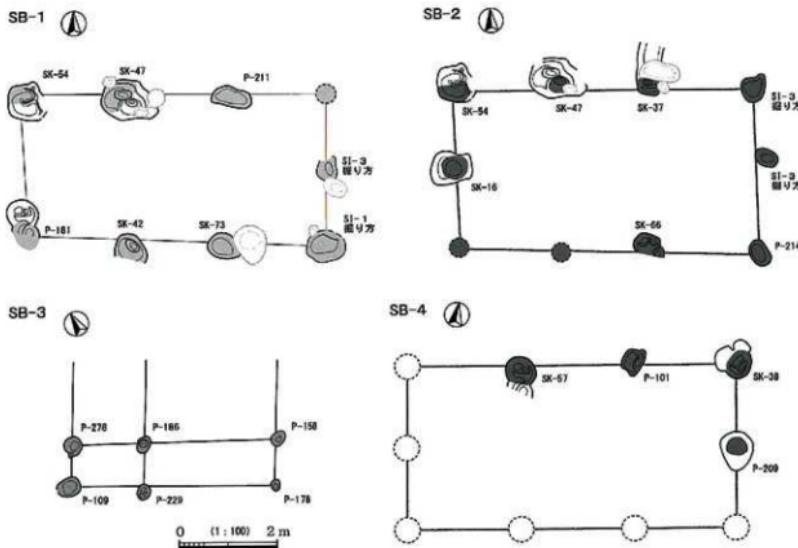
SB-9
東西約3m, N-74°W。
梁間(2)間×歩行(2)間+西下端柱と推測。
梁相行長5.48m、身合長4.28m。
歩行平均柱間1.115m±6.98尺。
身合柱間1.62m、1.48m。
総面積(17.1)af

0 (1:100) 2 m

第11図 造構図(3) SI-5・6・7・掘立柱建物跡・柱穴列[中近世]



掘立柱建物跡個別図 [古代]



SB-1
東北様、N-85°W。梁間1間・2間×桁行3間。
桁行長 6.67 × (6.11)m。
桁行平均柱間 2.027m ≈ 6.69 尺。
梁間幅 2.86 × (3.12)m。
面積 (18.24) m²

SB-2
東西様と推測、N-29°E。
梁間1間+西下反度×桁行2間以上+南下反度。
桁行長不明。分合員不明。
桁行平均柱間不明。
梁間幅 3.40 × (3.28)m。
面積 (20.3) m²

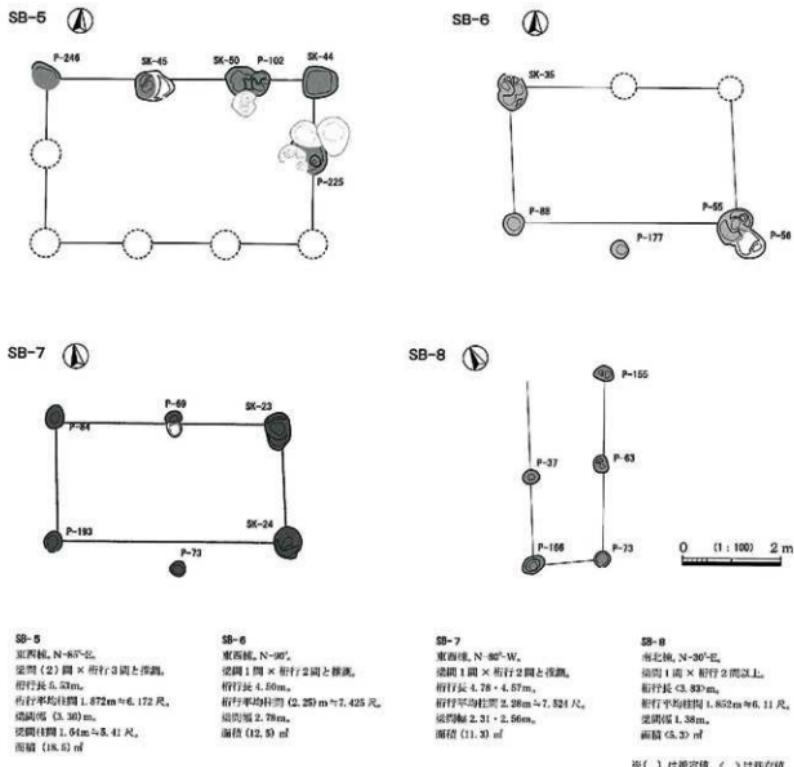
SB-3
南北様と推測、N-29°E。
梁間1間+西下反度×桁行2間以上+南下反度。
桁行長不明。分合員不明。
桁行平均柱間不明。
下反度桁行長 0.92m。
梁間幅 2.72m。下反度間隔 1.46m。

SB-4
東北様、N-79°E。梁間1間以上×桁行2間以上。
桁行長 (4.59)m。桁行平均柱間 2.25m ≈ 7.425 尺。
梁間幅 1.78m

() は推定値、< >は既存値

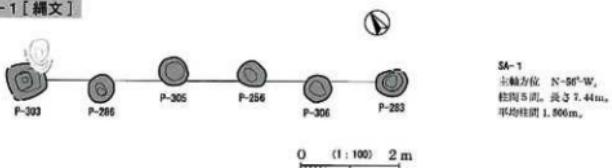
第 12 図 遺構図 (4) 掘立柱建物跡・柱穴列 [古代]

掘立柱建物跡個別図〔古代〕

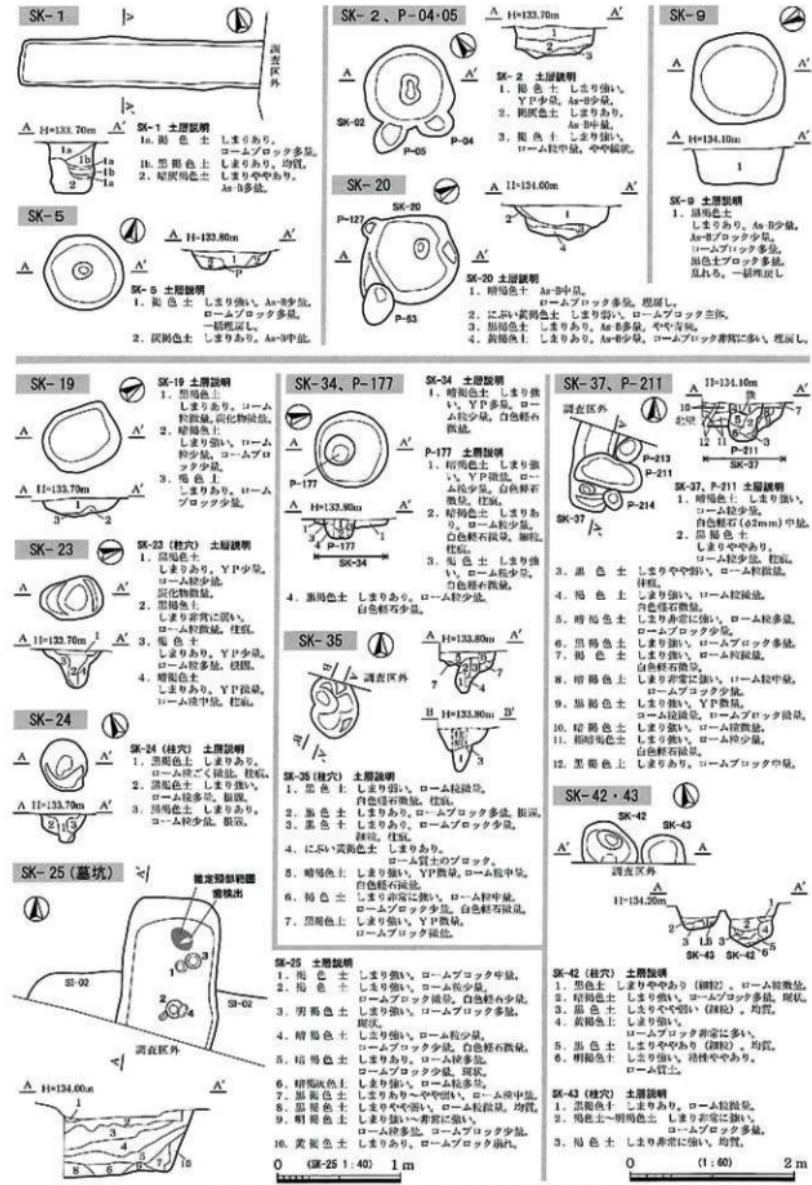


※()は推定値。< >は現存値

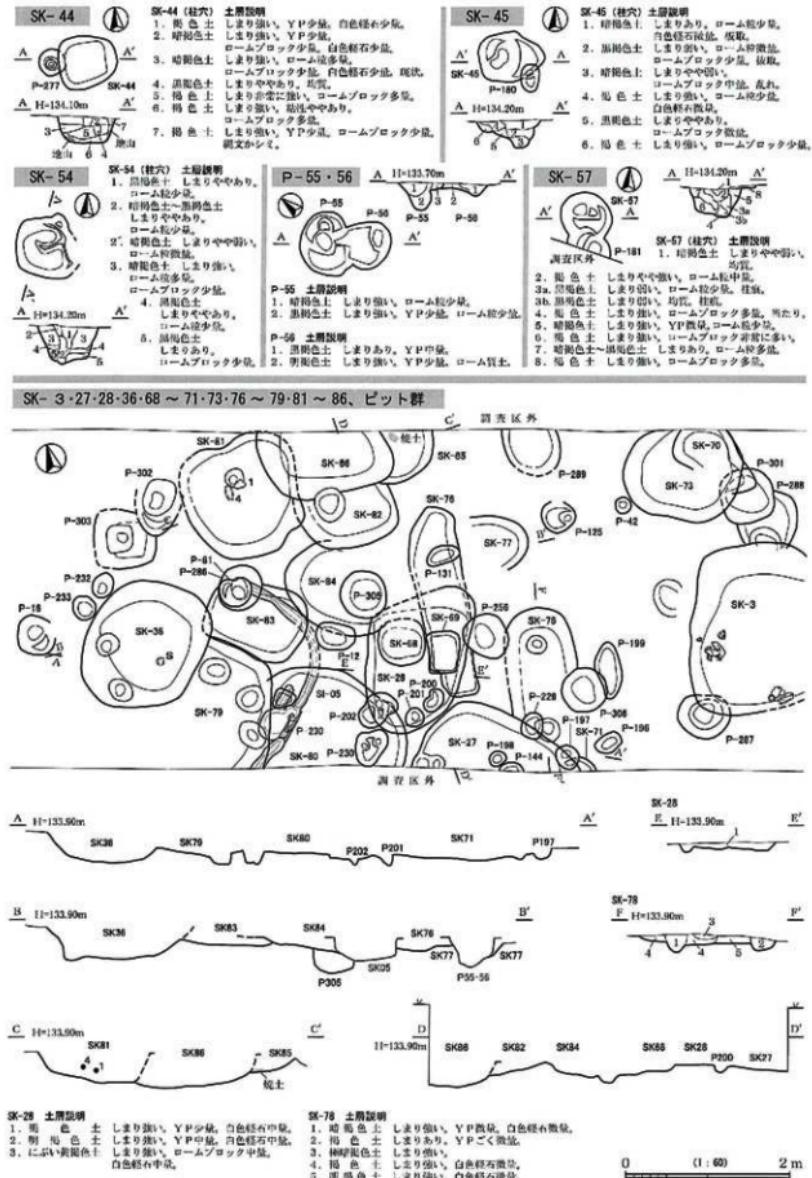
柱穴列・SA-1 [縦文]



第13図 遺構図(5) 掘立柱建物跡〔古代〕・柱穴列 [縦文]

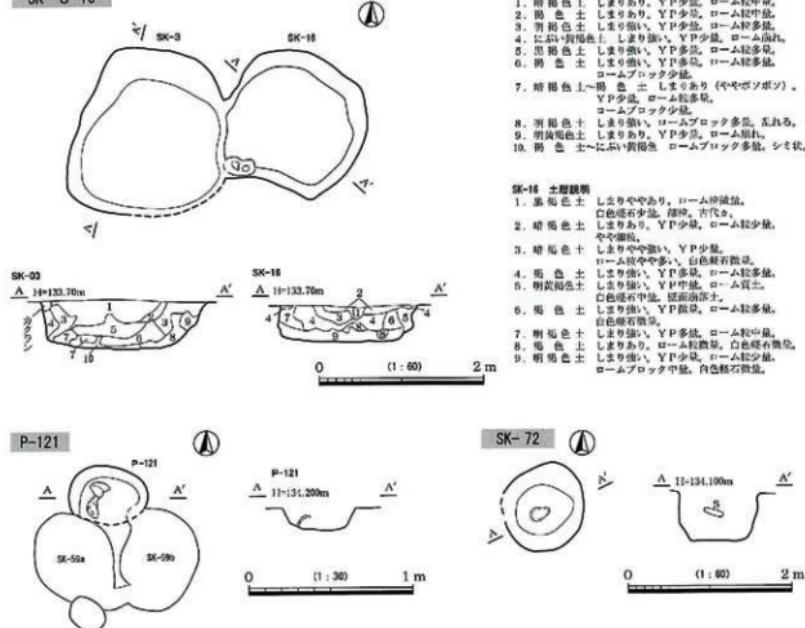


第14図 遺構図(6) 土坑・ピット [中近世・古代]

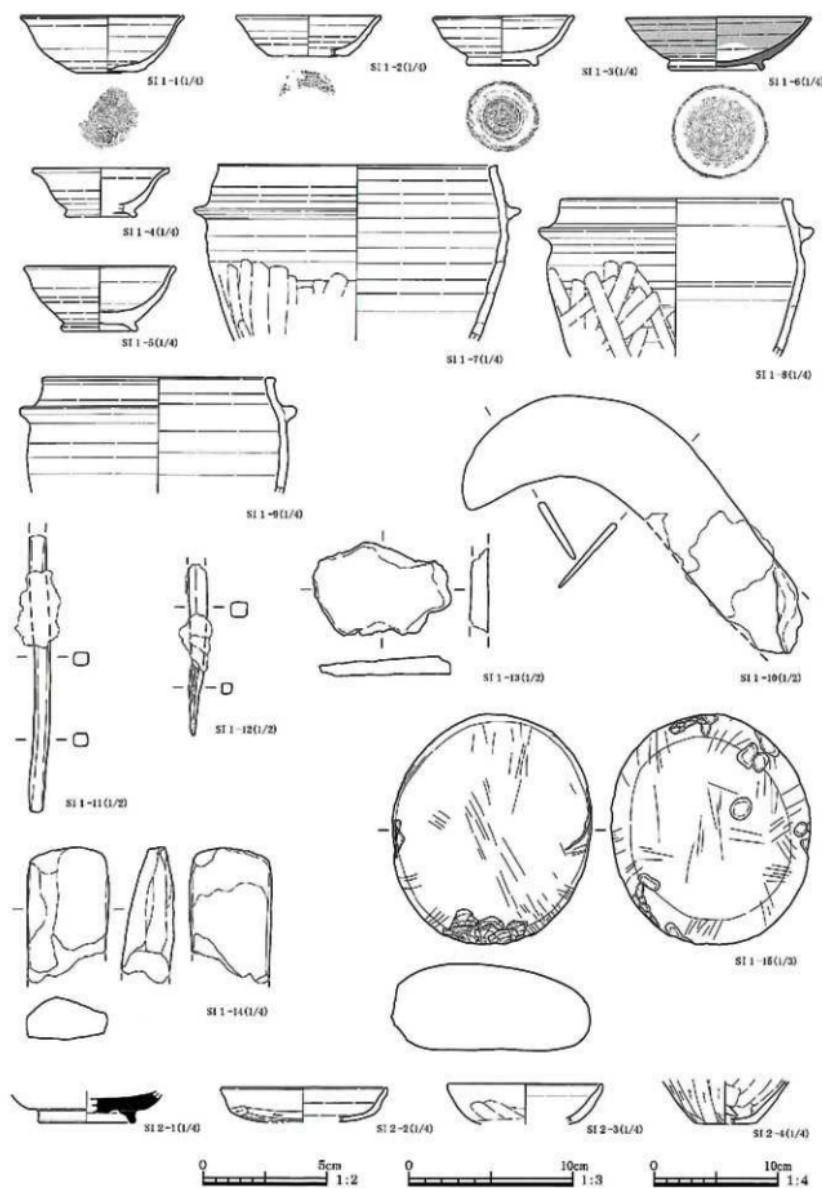


第15図 遺構図(7) 土坑・ピット【古代・縄文】

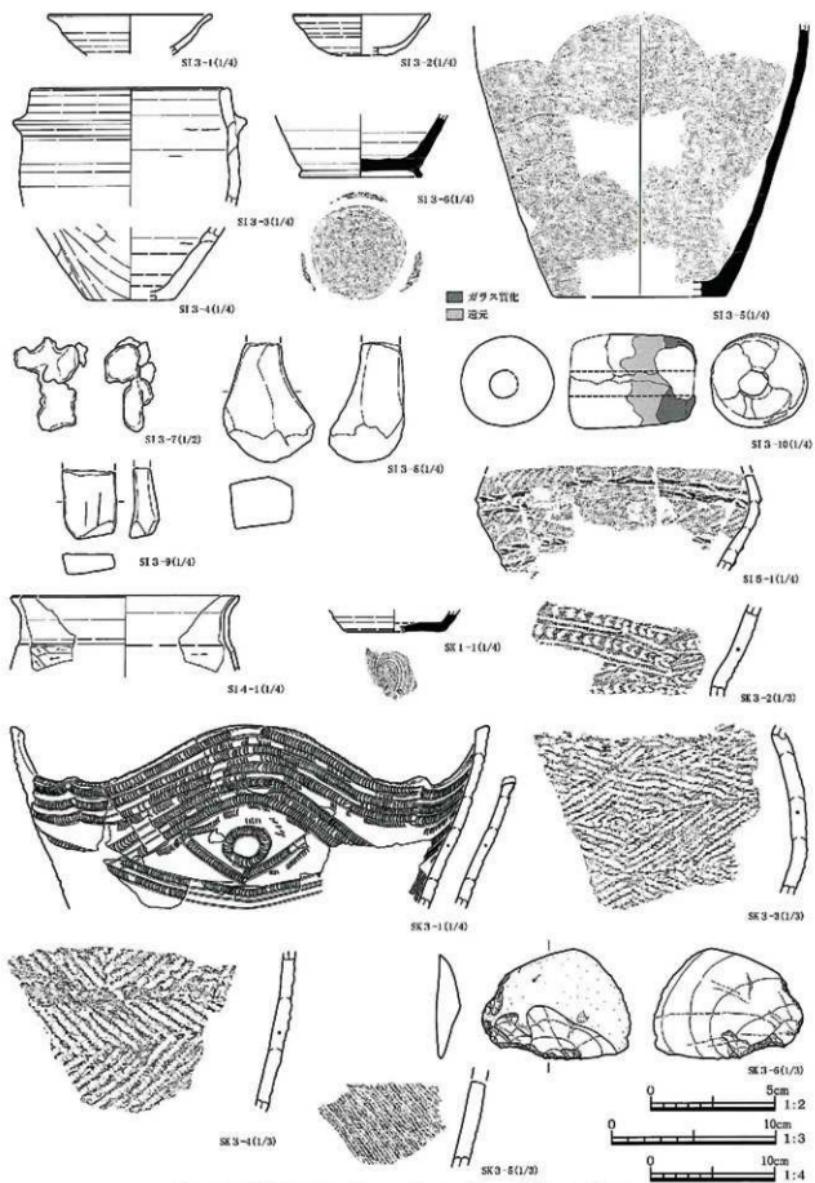
SK- 3 • 16



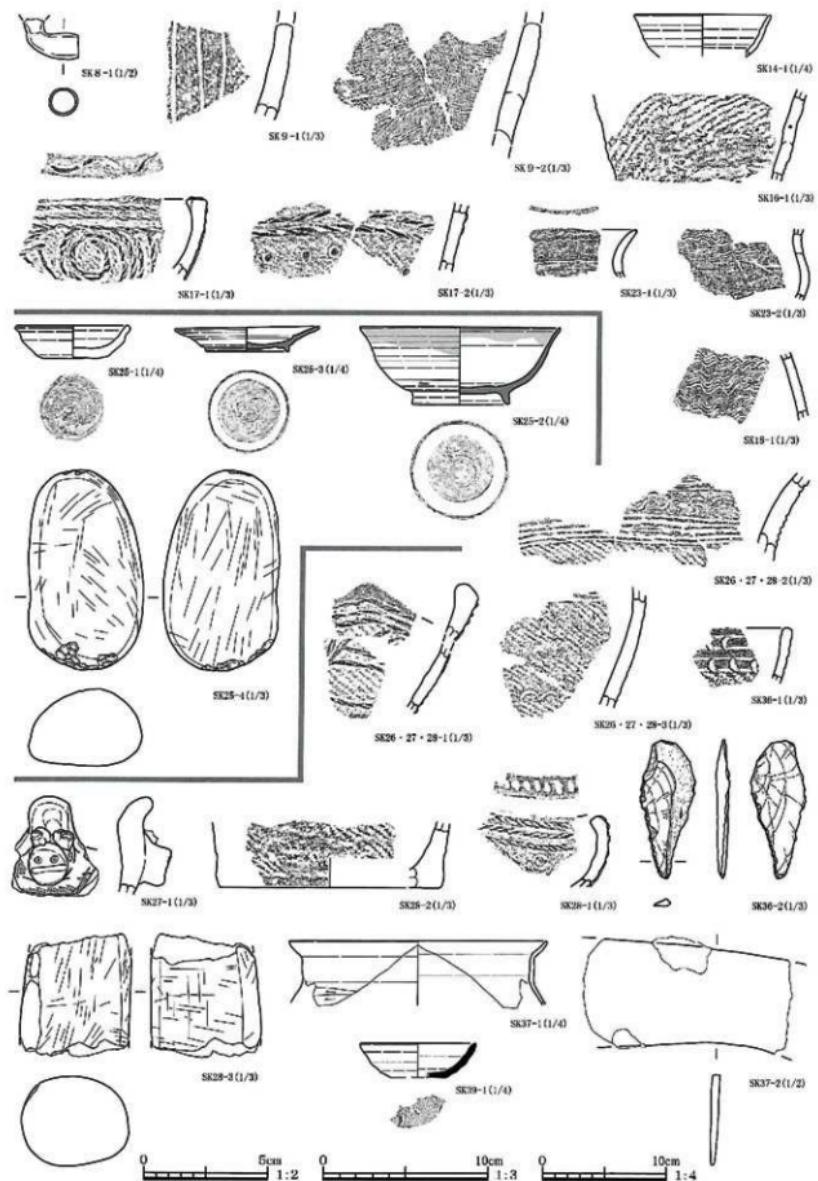
第16図 遺構図(8) 土坑・ピット [縦文]



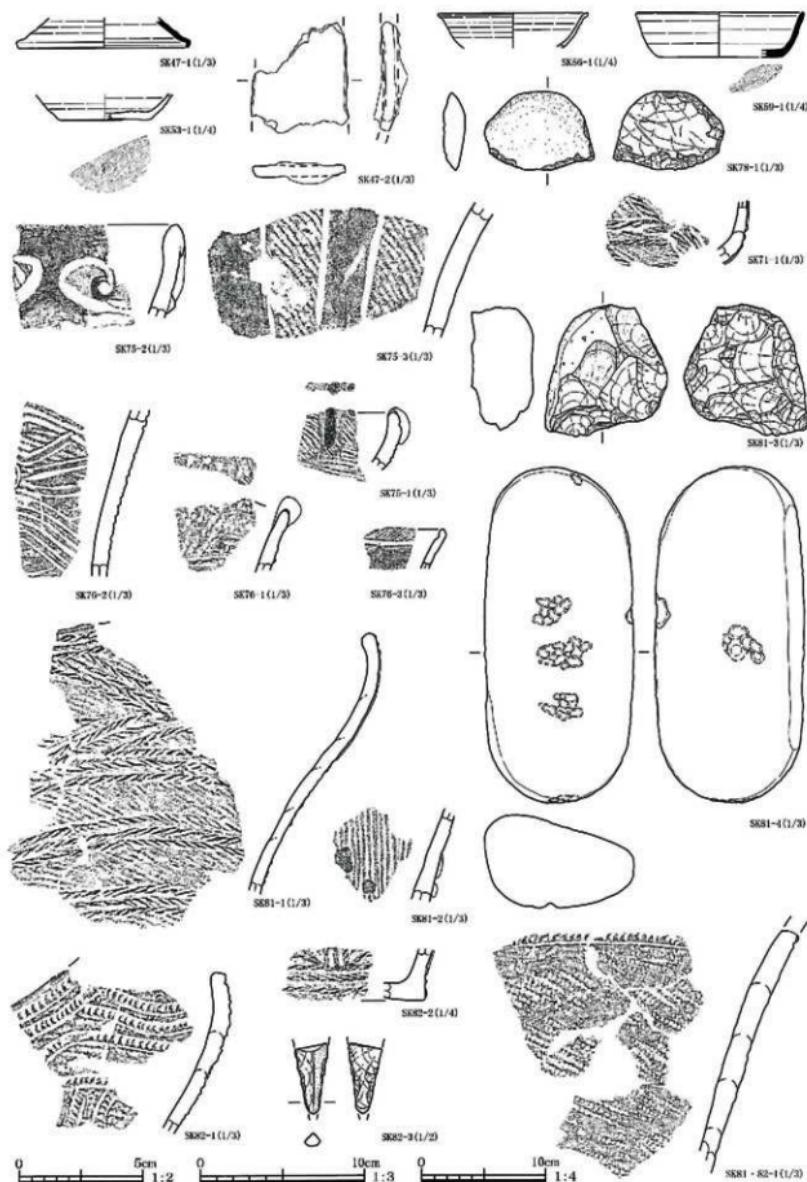
第17圖 遺物図(1) SI-1・SI-2



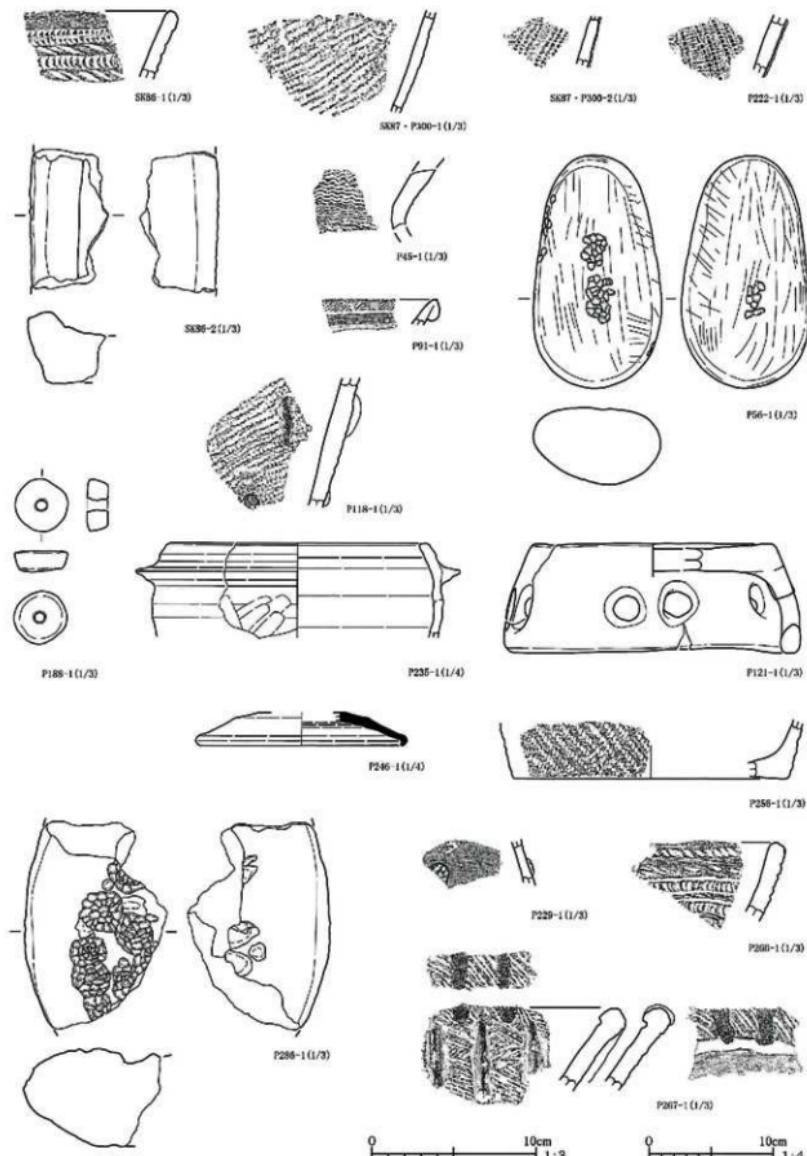
第18図 遺物図 (2) SI-3・SI-4・SI-5 / SK-1・SK-3



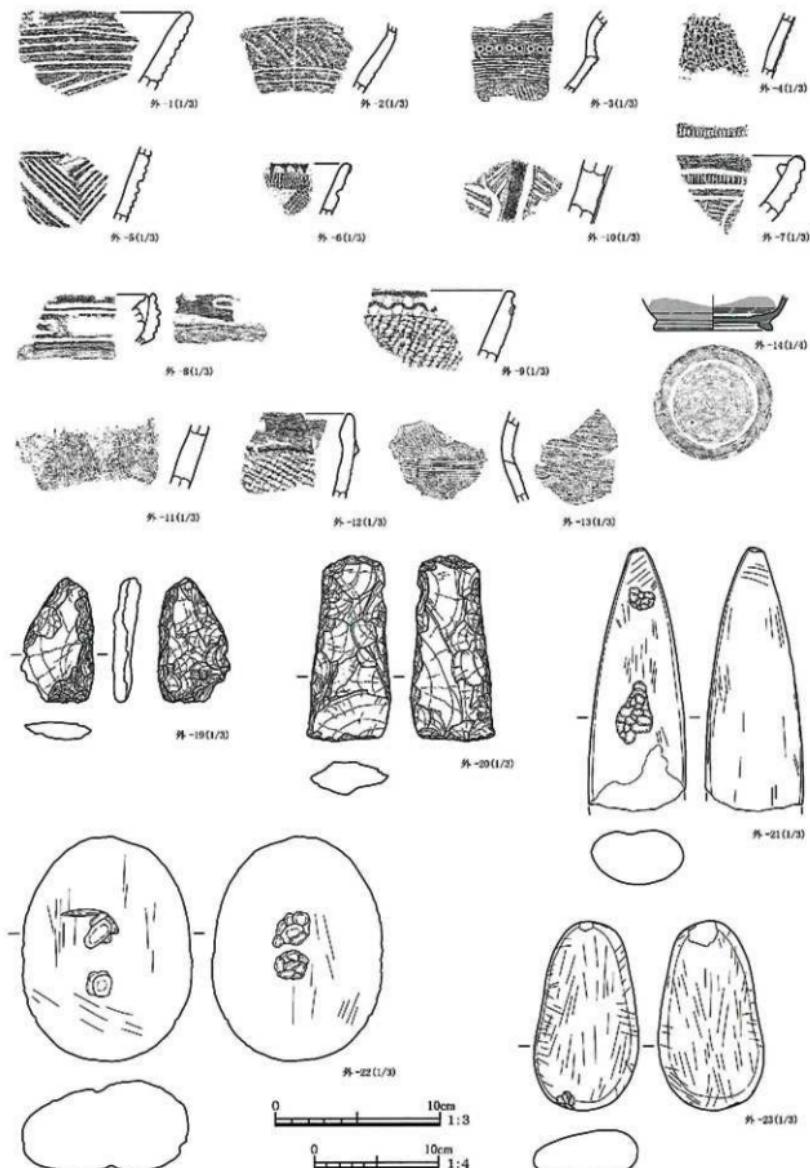
第19図 遺物図 (3) SK- 8・9・14・16・17・18・23・25・26・27・28・36・37・39



第20図 遺物図 (4) SK-53・56・59・71・75・76・78・81・82



第21図 遺物図(5) SK-86・87 (P-300) /
P-45・56・91・118・121・188・222・229・235・246・256・266・267・286



第22図 遺物図(6) 遺構外出土遺物(1~23)

第11表 SI-1 出土遺物観察表（単位：cm, g）

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③断土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-1 1	須恵器 壺	口径 (13.1) 底径 5.0 器高 4.7	①焼成 ②灰白色 / 淡黄色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：輪縁整形。底部右四軸系切り後、無調整。 内面：輪縁整形。	No.8	
SI-1 2	須恵器 壺	口径 (11.6) 底径 (5.9) 器高 (3.3)	①焼成 ②灰白色 / 淡黄色 ③石英、片岩 ④1/4	外面：輪縁整形。底部回転系切り後、無調整。 内面：輪縁整形。	No.5 カマ ド、 床下土塗	
SI-1 3	須恵器 壺	口径 11.3 底径 3.7 器高 4.2	①焼成 ②灰白色 / 黑褐色 ③石英、黑色鉱物 ④1/4	外面：輪縁整形。底部回転系切り後、高台貼付し、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	No.1 カマ ド、 床直	
SI-1 4	須恵器 壺	口径 (10.8) 底径 (5.2) 器高 4.1	①焼成 ②灰白色 / 同左 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：輪縁整形。底部回転系切り後、高台貼付し、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	No.2 カマド	
SI-1 5	須恵器 壺	口径 (12.0) 底径 6.7 器高 5.4	①焼成 ②灰白色 / 同左 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/3	外面：輪縁整形。底部回転系切り後、高台貼付し、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	カマド 掘り方	
SI-1 6	須恵器 壺	口径 15.0 底径 7.5 器高 4.4	①焼成 ②淡黄褐色 / 灰オリーブ(釉) ③石英、角閃石、白色、赤色岩片 ④口縁～底部 5/8	外面：輪縁整形。高台貼付後、底面ナダ調整。 底盤受け剥け。 内面：輪縁整形。見込みに重ね施釉。 施釉受け剥け。	No.6 脇窓 穴 底面附近	大原 2 号 窓式試貼
SI-1 7	羽釜	口径 (14.4)	①焼成 ②灰白色 / 淡黄色 ③石英、黑色鉱物、赤色粒 ④口縁～胴部 1/5	外面：輪縁整形。鋤貼付後、ナダ調整。 胴部斜面ナダ。 内面：輪縁整形。	No.4 カマ ド、No.7 窓穴	
SI-1 8	羽釜	口径 (18.8) 底径 (13.0)	①焼成 ②灰白色 / 同左 ③石英、角閃石、白色粒 ④口縁～胴中部破片	外面：輪縁整形。鋤貼付後、ナダ調整。 胴上～中部斜面ナダ。 内面：輪縁整形。	覆土一括	
SI-1 9	羽釜	口径 (18.6) 底径 7.0 器高 (9.5)	①焼成 ②灰白色 / 同左 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④口縁部～胴中部破片	外面：輪縁整形。鋤貼付後、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	床下土塗	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③断土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-1 10	鉄製品 錐	基 (茎) 部欠損。長さ：<16.0	最大幅：3.6 厚さ：0.15～0.4 重さ：72.79		掘り方	
SI-1 11	鉄製品 錐	長さ：(11.4)	厚さ：0.5～0.7 重さ：22.43		覆土下層	角棒状
SI-1 12	鉄製品 錐	長さ：(7.1)	厚さ (茎部含む)：0.4～0.8 重さ：7.78		覆土下層	
SI-1 13	鉄製品 錐	長さ：(3.9)	最大幅：5.7 厚さ：0.9 重さ：30.32		覆土一括	板状
SI-1 14	石製品 硯	4面使用。うち1面は、一部に自然面がある。底盤は平滑。試証岩製。			覆土下層	
SI-1 15	石器 硯	長さ：(11.1) 最大幅：6.7 厚さ：1.4～4.0 重さ：31.52			覆土下層	
SI-1 15	石器 硯	自然縞を素材とし、表面・裏面に摩耗痕・擦痕。裏面は摩耗頭著、平滑。周縁に踏打痕・剥離痕。安山岩製。	長さ 14.6 横 12.2 厚さ 5.3 重さ 1441.89		覆土下層	被熱風変形あり。

第12表 SI-2 出土遺物観察表（単位：cm, g）

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③断土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-2 1	須恵器 壺	口径 (7.6) 底径 (2.3)	①透天縫 ②灰白色 / 灰白色 ③石英、黑色鉱物、白色粒	外面：輪縁整形。高台貼付後、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	覆土一括	
SI-2 2	土師器 壺	口径 (13.2) 底径 (2.8)	①焼成 ②にい黄褐色 / にい黄褐色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：口縁部コロナガ後、体部～底部へラケタリ。 内面：ヨコナダ。	覆土一括	
SI-2 3	土師器 壺	口径 (12.4) 底径 (3.3)	①焼成 ②にい黄褐色 / 同左 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：口縁部コロナダ。体部ナダ。 内面：ヨコナダ。	覆土下層	
SI-2 4	土師器 壺	口径 (10.8) 底径 (5.2)	①焼成 ②にい黄褐色 / にい黄褐色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④脚下部～底部破片 器高 4.1	外面：段位へラケタリ。 内面：ヘラナダ。	覆土一括	

第13表 SI-3 出土遺物観察表①（単位：cm, g）

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③断土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-3 1	須恵器 壺	口径 (13.2) 底径 3.3	①透天縫 ②灰黄色 / 黄灰色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：輪縁整形。 内面：輪縁整形。	掘り方	
SI-3 2	須恵器 壺	口径 (11.0) 底径 (4.4)	①焼成 ②にい黄褐色 / 同左 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/2	外面：輪縁整形。 内面：輪縁整形。	掘り方	
SI-3 3	羽釜	口径 (15.0) 底径 (7.0)	①透天縫 ②灰黄色 / 黄灰色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④1/6	外面：輪縁整形。鋤貼付後、ナダ調整。 内面：輪縁整形。	カマド 1 前側、掘 り方	
SI-3 4	羽釜	口径 — 底径 (5.9)	①透天縫 ②灰黄色 / 黄灰色 ③石英、黑色鉱物、白色粒 ④脚下部～底部破片	外面：輪縁整形後、斜面ナダ。 底部回転系切り後、ナダ。 内面：輪縁整形。	No.3 カマド 2 前面	

第14表 SI-3 出土遺物観察表②(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-3 5	須恵器 甕	口径 一 底径 (14.1) 器高 (22.3)	①還元焰 ②灰褐色/灰黄色 ③石英、白色粘土 ④脚部中部～底部 1/6	外面：輪積み後、タタキ整形。脚部ナデ後、底部直上～底面へラケズリ。 内面：輪積み後、タタキ整形。脚部～底部ナデ。	カマド前、 カマド跡 リ方	
SI-3 6	須恵器 盞	口径 一 底径 10.0 器高 (<5.2)	①還元焰 ②灰色/灰オリーブ色 ③石英、黑色粘物、白色粘土 ④脚部下部～底部破片	外面：輪積み後、他略整形。底部ナデ。 高台貼付後、ナゲ調整。 内面：輪積み後、他略整形。底部指ナデ。	土坑 2 No. 1	大原 2 号 室式墓陪
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-3 7	土製品 羽口	波熱著しい 長さ : 10.3 底径 : 7.8	①乳白色 ②灰褐色 ③石英	脚部溶融。略完全形。 乳白色	脚部羽口 十块 2 No. 2	
SI-3 8	泥治津 波熱津	長さ : 3.8	最大幅 : 2.9	重量 : 9.48	土坑 2 No. 4	
SI-3 9	石製品 鉢	長さ : <9.8	最大幅 : 6.1	厚さ : 3.9 重量 : 309.6	石材: 砂岩製。	下层 No. 5
SI-3 10	石製品 鉢	長さ : <5.6	最大幅 : 4.35	厚さ : 1.65 重量 : 62.5	石材: 砂岩製。	覆土一括

第15表 SI-4 出土遺物観察表(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-4 1	土師器 甕	口径 (18.3) 底径 (7.0) 器高 (<2.3)	①化粧土 ②橙色/褐色 ③石英、黑色粘物、白色粘土 ④脚部上部破片	外面: 口縁部ヨコナギ。脚部直上～脚部ヨコナギ。 内面: 口縁部～脚部ヨコナギ。	覆土一括	

第16表 SI-5 出土遺物観察表(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-5 1	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 (<1.8)	①良好 ②明黄褐色 ③石英、白色粘物、白色粘土 ④脚部上部 1/3	外面: 脚部半周 LR 文を横位施文後、ヘラ状工具によるキザミヨコダツ文を施文。 内面: 横位・斜位のナゲ。	覆土一括 壁穴に伴う P-230	前後後縫接合 し式。外面久 ス付着、内面 ヨコ付着

第17表 土坑出土遺物観察表①(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-1 1	須恵器 甕	口径 一 底径 (18.2) 器高 (<1.8)	①良好 ②灰褐色 ③石英、白色粘物、白色粘土 ④脚部上部 1/4	外面: 脚部直上～脚部上半部 内面: 輪積み整形。	覆土一括、 混入	
SK-3 1	圓文土器 深鉢	口径 (39.0) 底径 一 器高 一	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、チャート、凝灰岩粒、白色粘土 ④脚部上部 1/2	外面: 4 単位の波状口縁。口縁部半周竹管状工具間にによるキザミヨコダツ文。口縁部～脚部同様の工具による平行沈線で迷習する菱形の円文を施文。区间内には横位の手法で円文を施文。平行沈線間に爪形文、V 字状文を施文。 内面: 横位のミガキ。	覆土中位 壁穴に伴う P-230	前中期葉・ 有尾式 外側ス付着 内面黒底あり
SK-3 2	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①普通 ②にぶい黄褐色 ③石英、赤色粘土、鐵錆(多量) ④脚部破片	外面: 前期葉單面 LR、BL 文を交互に横位施文 内面: 横位・斜位のナゲ。	覆土中位	圓文前期中葉 有尾式 2 号鉢
SK-3 3	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②褐色 ③石英、白色粘土、黑色粘土、赤色粘土、鐵錆 ④脚部破片	外面: 前期葉單面 LR、BL 文を交互に横位施文(反時計回り、下→上)。 内面: 横位・斜位のナゲ。	覆土中位	圓文前期中葉 外側ス付着
SK-3 4	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、白色粘土、黑色粘土、赤色粘土、鐵錆 ④脚部破片	外面: 脚部直上半周 LR 文を横位施文。 内面: 横位・斜位のナゲ。	覆土一括	圓文前期中葉 内面ニゲ付着
SK-3 5	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、赤色粘土、鐵錆 ④脚部破片	外面: 脚部直上半周 LR 文を横位施文。 内面: 横位のナゲ。	覆土一括	圓文前期 外側黒底あり
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-3 6	石器 スクレイパー	長さ : 6.8 幅 : 9.1 厚さ : 1.6	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、赤色粘土 ④脚部破片	端皮が残る剥片削材を使用し、剥片の一部に両面 2 次調整。縫縫部に連続する微鋸割痕。質岩質。	覆土一括	
SK-8 1	金剛製品 煙管	長さ : 2.25 最大幅 : 1.1	重さ : 83.09	内部に留め手の一部が残存。	覆土一括	近世
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③埴土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-9 1	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、赤色粘土 ④脚部破片	外面: 脚部半周 LR 文を横位施文～丸棒状工具による平行沈線文。区間に爪形文を施文。内面: 横位のナゲ。	覆土一括、 混入	圓文中期後葉 加賀利 3 田
SK-9 2	圓文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好、堅密 ②にぶい赤褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、赤色粘土 ④脚部破片	外面: 脚部 6 本前の前庭工具による継ぎ・斜位の条線を施文。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一括、 混入	圓文中期後葉

第18表 土坑出土遺物観察表②(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③粘土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-14 1	須恵器 片	口径(11.1) 底径 — 器高(3.4)	①焼成 ②暗灰黄色 ③白色 ④底面1/5	外面: 雜體形容。 内面: 雜體形容。	覆土一様, 深入	
SK-16 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①焼成 ②褐色 ③石英、黑色鉱物、白色鉱物 ④輪郭破片	外面: 腹部單面LR陶文を横位施文。 内面: 混位のナギ。	陶文前期中葉 内面コグ付着	
SK-17 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①焼成 ②褐色 ③石英、角閃石、黑色鉱物、白色鉱物 ④口縁破片	外面: 平口縁。口唇部平凸竹管状工具による平行沈窓で被状文を施文。口縫部單面LR陶文を横位施文へ→ラ状工具によるキザミ浮雕文を施文。 内面: 横位のケズリ・横位のミガキ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-17 2	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①やや不良 ②褐色 ③石英、白色鉱物 (多量) ④側部破片	外面: 腹部單面LR陶文を横位施文へ→ラ状工具によるキザミ浮雕文、竹管状工具による刺突判点文を施文。 内面: 横位のナギ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-18 1	弥生土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①良好 ②褐色 ③石英、黑色鉱物、赤色鉱物 ④輪郭破片	外面: 腹部4~5本筋の横凹波状文を横位施文 (上→下)。 内面: 横位のミガキ。	覆土一様	弥生後期壺式 外面スヌ・内面コグ付着
SK-23 1	弥生土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①良好 ②灰黃褐色 ③石英、チャート、赤色鉱物 ④口縁部破片	外面: 口縫部へラ状工具によるキザミ。口縫部7~8本筋の横凹波状文を横位施文へ→ラ状工具によるキザミ浮雕文。 内面: 横位のミガキ。		弥生後期壺式 外面スヌ・内面コグ付着
SK-23 2	弥生土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	①良好 ②灰黃褐色 ③石英、白色鉱物 (多量) ④輪郭破片	外面: 腹部7本筋の横凹波状文 (下→上) を横位施文へ→ラ状工具による横位のミガキ。 内面: 横位・斜位のミガキ。		弥生後期壺式 外面スヌ・内面コグ付着
SK-25 1	須恵器 片	口径 9.0 底径 5.4 器高 2.7	①焼成 ②灰白色 / 白白色 ③石英、黑色鉱物、赤色鉱物 ④ほぼ丸形	外面: 他體形容。底部を圓錐形に切り後、無調整。 内面: 他體形容。	底面付近 No.2	副葬品
SK-25 2	灰釉陶器 壺	口径 7.9 底径 7.9 器高 4.3	①焼成 ②灰白色 / 白白色 ③石英、赤色鉱物 ④丸形	外面: 他體形容。高台貼付後、ナダ調整。 内面: 他體形容。見込みに重ね焼き痕。	底面付近 No.3	副葬品
SK-25 3	灰釉陶器 広底盤	口径 11.3 底径 8.7 器高 2.1	①焼成 ②灰白色 / 白白色 ③黑色鉱物、灰色鉱物 ④光形	外面: 他體形容。底部圓錐形に切り後、高台貼付し、ナダ調整。軸抜け掛け。 内面: 他體形容。	底面付近 No.1	副葬品
番号	器種	法量(cm) / 成・整形技法の特徴			出土層位	備考
SK-25 4	石器・石製品 磨石・敲石	自然端を素材とし、表・裏面に摩耗痕。裏面は滑面で、砥石として古代に軒用か。上・下端部に斜打頭部製作。 長さ: 12.4 橋: 7.1 厚さ: 4.7 重量: 600.5			底面付近 No.4	陶文石器の 用具・副葬品
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③粘土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-26 -27 -28 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③石英、片岩、チャート ④輪郭破片	外面: 袋狀口縫。口縫部單面LR陶文を横位施文へ→ラ状工具によるキザミ浮雕文。 内面: 横位のナギ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-26 -27 -28 2	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①並 ②灰褐色 ③石英、片岩、チャート ④輪郭破片	外面: 腹部單面LR陶文 (字結構) を横位施文へ→半斜管状工具による横位の集合凹窓文を施文。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-26 -27 -28 3	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、片岩、凝灰岩 ④輪郭破片	外面: 腹部單面LR陶文 (字結構) を横位施文へ→半斜管状工具による横位の平行沈窓文を施文。 内面: 横位のナギ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-27 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①並 ②褐色 ③石英、片岩、黑色鉱物、赤色鉱物 ④口縫部破片 (腹面把手部)	外面: 袋狀口縫。腹部頂部圓錐把手。竹管状工具による上部切削と刺突で斜裂表現。把手下は斜打頭部。陶文を横位施文へ→半斜管状工具による横位の平行沈窓文。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-28 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①良好 ②褐色 ③石英、凝灰岩 ④口縫部破片	外面: 袋狀口縫。口縫部には丸棒状工具によるキザミ。口縫部單面LR陶文を横位施文へ→ラ状工具によるキザミ浮雕文、竹管状工具による刺突文を施文。 内面: 横位のミガキ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-28 2	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 (13.4) 器高 —	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、凝灰岩 ④底面破片	外面: 腹部單面LR陶文を横位施文。底部ナダ。 内面: 横位のナギ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
番号	器種	法量(cm) / 成・整形技法の特徴			出土層位	備考
SK-28 3	石器 石斧	伴状石とし、全体に摩耗痕。被然による被削痕あり。両端部欠損。安山岩製。 長さ: <7.0 直径: 5.5~6.8 重さ: 47.6			覆土一様	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③粘土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-36 1	陶文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	①並 ②灰黃褐色 ③石英、黑色鉱物 ④口縫部破片	外面: 平口縫。口縫部單面LR陶文を横位施文へ→半斜管状工具による横位平行沈窓へ→斜面間に同じ工具による爪形文施文。 内面: 横位のナギ。	覆土一様	陶文前期後葉 諸族b式
SK-36 2	石器 石鎌	深皮が残る横長削片を素材とし、2側面に片面調節を施して鎌部を作出。先端は使用により磨滅。 長さ: 8.6 橋: 3.4 厚さ: 1.0 重さ: 15.5			覆土一様	

第19表 土坑出土遺物觀察表③(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-37 1	土師甕 甕	口径(20.7) 底径(5.3) 高さ(5.3)	①焼成 ②石英、黒色鉱物、白色粒、赤色粒 内面 ③白土 ④口縁部~胴上部1/8	外面: 口縁部~胴部ヨコナギ。胴上部ヘラケズリ。 内面: 口縁部~胴部ヨコナギ。	覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-37 2	鉢製品 縫	破片。長さ: <8.6 最大幅: 4.6 厚さ: 0.2~0.5 重量: 50.6		覆土上層		
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-39 1	明治器 壺	口径(9.2) 底径(5.0) 高さ(2.8)	①焼成 ②石英、黒色鉱物、赤色粒 内面 ③白土 ④1/4	外面: 鞭撻捺形。底部右回転糸切り後、黒調整。 内面: 鞭撻捺形。	覆土一括	
SK-47 1	須恵器 壺	口径(13.7) 底径(2.5)	①焼成 ②灰白色/灰色 内面 ③石英、黒色鉱物 ④1/8	外面: 鞭撻捺形。 内面: 鞭撻捺形。	覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-47 2	鉢製品 不明	破片。長さ: <4.6 最大幅: 4.0 厚さ: 0.7 重量: 17.1		覆土上層		
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-53 1	須恵器 壺	口径(7.4) 底径(2.1)	①焼成 ②石英鉱物、白色粒 内面 ③白土 ④底部1/2	外面: 鞭撻捺形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面: 鞭撻捺形。	覆土一括	
SK-56 1	須恵器 壺	口径(12.2) 底径(2.9)	①焼成 ②灰白色/灰色 内面 ③石英、白色粒、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 鞭撻捺形。底部右回転糸切り後、黒調整。 内面: 鞭撻捺形。	覆土一括	
SK-59 1	須恵器 壺	口径(11.8) 底径(6.4) 高さ(3.7)	①焼成 ②灰白色/灰白色 内面 ③石英、白色粒、白色粒 高さ(1.3)	外面: 鞭撻捺形。底部右回転糸切り後、黒調整。 内面: 鞭撻捺形。	覆土一括	
SK-71 1	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①焼成 ②褐色 内面 ③石英、片岩 高さ(3.7)	外面: 膜附單面RL 繩文を横位施文へラ形状。見によるキザミ浮き文。 内面: 膜附のケツリ一筋、斜位のナヂ。	圓文前階後葉 諸器b式	
SK-75 1	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい褐色 内面 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 平口縁。半截竹管状工具による横位・斜位の集合沈線を施文へボタン状・棒状貼付文を施す。 内面: 横位のナヂ。	古代土器、 泥入	圓文前階後葉 諸器c式 外面ス付着
SK-75 2	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい黄褐色 内面 ③石英、角閃石、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 平口縁。口縁部ミガキ調節を施した陰帶による横円形文様・繩文を施す。 内面: 円柱内に九挿状工具による斜位沈線文。瓦崩・同様工具で隔壁壁に沈線を施す。 内面: 横位のナヂ。	覆土一括	圓文前階後葉 諸器d式
SK-75 3	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好・堅薄 ②にぶい黄褐色 内面 ③石英、角閃石、凝灰岩質、白色粒(多量)、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 膜附單面RL 繩文を底位施文へ丸棒状工具による疊形で施文を施す。沈線文を一番おきに継続的ミガキ。 内面: 横位、斜位のナヂ。	覆土一括	圓文中期後葉 加賀壹E式 2次被熱
SK-76 1	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①やや不良 ②にぶい褐色 内面 ③石英、片岩、繩(多量)、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 平口縁。口縁部單面RL 繩文を横位施文へラ形状工具によるヤヂミ浮き文を施す。 内面: 斜位のミガキ。	覆土一括	圓文前階後葉 諸器b式
SK-76 2	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①やや不良 ②灰褐色 内面 ③石英、黒色鉱物、白色粒(多量) 高さ(3.7)	外面: 膜附単面RL 繩文を横位施文へ平截竹管状工具による平行横文を施す。 内面: 横位のケツリ一筋位のナヂ。	SK-76 と P-131が 接合	圓文前階後葉 諸器b式 外面ス付着
SK-76 3	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい黄褐色 内面 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 平口縁。口縁部横位ナヂ、單面IR 繩文横位丸棒状工具による横位沈線文。 内面: 口縫部丸棒状工具による横位沈線文。	覆土一括	圓文後期前葉 諸器内式
SK-76 4	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい褐色 内面 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 高さ(3.7)	外面: 平口縁。口縫部横位ナヂ、單面IR 繩文横位丸棒状工具による横位沈線文。 内面: 口縫部丸棒状工具による横位沈線文。	覆土一括	圓文後期前葉 諸器内式
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-78 1	石器 スクリーパー	長さ4.8 幅6.6 厚さ1.3 重量32.8	表面が疾る剥片を素材とし、縁辺に両面加工を施す。流紋岩製。	覆土一括		
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-81 1	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい黃褐色 内面 ③石英、黒色鉱物 高さ(3.7)	外面: 流紋岩。口縫部~胴部単面RL 繩文を横位施文へラ形状工具によるキザミ浮き文を施す。 内面: 口縫部横位のミガキ、胴部横位のナヂ。	覆土中位 No. 1	圓文前階後葉 諸器b式 外面ス付着
SK-81 2	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい黃褐色 内面 ③石英、チャート 高さ(3.7)	外面: 膜附半截竹管状工具による横位の集合沈線文。沈線文を施文へボタン状貼付文を施す。 内面: 斜位のケツリ~ナヂ。	覆土中位	圓文前階後葉 諸器c式 2次被熱
番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-91 3	石器 碧砂器	長さ8.2 幅7.6 厚さ2.8 重量257.1	素材の周縁に両面加工を施し刃部とする。刃部周辺に微細削離痕あり。黑色安山岩製。	覆土中位		
SK-91 4	石器 磨	横円形の自然縫を素材とし、裏・裏面中央・右側面中央。下端に敲打痕。安山岩製。	長さ20.7 幅9.2 厚さ5.7 重量1823.9	No. 2		
SK-91 82 1	圓文土器 深鉢	口径 — 底径 — 高さ —	①良好 ②にぶい褐色 内面 ③石英、片岩(多量) 高さ(3.7)	外面: 膜附単面RL 繩文を横位施文へ平截竹管状工具による横位の平行沈線文を施す。 内面: 横位、斜位のナヂ。	覆土一括	圓文前階後葉 諸器b式 外面ス付着

第20表 土坑出土遺物觀察表④(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
SK-82 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①丸好 ②灰褐色 ③石英、片岩(大粒) ④口縁部破片	外面: 波状口縁。口縁部半周 RL 繩文を斜位施文→半周竹管状工具による横位の平行 続縄文を施文。平行沈縄間に同様工具 で爪形文を施す。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一括	繩文前期後葉 諸縄b式 外面スヌ付帶
SK-82 2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、チャート、珪 ④底部破片	外面: 腹部半周 RL 繩文を横位施文→ヘラ状工 具によりキザミ浮縄文施文。底部ナデ。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	繩文前期後葉 諸縄b式 2次被熱
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
SK-82 3	石器 石錐	長さ 幅 厚さ	2.0 1.4 0.5	重量 2.56	外面: 縫皮を複数長削片を素材とし、2回側に両面調整を施し頭部を作成。上平部欠損。黒色安山岩製。	覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
SK-86 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、長石、チャート ④口縁部破片	外面: 平口縁。半周竹管状工具による横位の 平行沈縄文→ヘラ状工具による横位の キザミを交互に施文→平行沈縄間に半 周竹管状工具による爪形文を施文。 内面: 斜位のミガキ。	底面直上	繩文前期後葉 諸縄b式
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
SK-86 2	石器 石錐	長さ 幅 厚さ	2.0 1.4 0.5	重量 1.57	一部残存。全幅が加工が施されており、台部・錐部・腹面が明瞭である。錐部はやや外反している。 錐部に黒い色が認められる。安山岩製。	覆土一括	前期後葉カ
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
SK-87 P-300 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①やや不良 ②明褐色 ③石英、チャート、赤色粒 ④脚部破片	外面: 腹部半周 RL 繩文を横位施文。 内面: 斜位のナデ。	覆土上層	繩文前期後葉 初期にタール 状物質付着
SK-87 P-300 2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、黑色鉱物、凝灰岩粒 ④脚部腹片	外面: 腹部3~4箇の脚部状工具による横位 の集合状縄文を施文→半周竹管状工具 による3本一組の縫合浮縄文を施文。 内面: 斜位のケズリ。	覆土上層	繩文前期後葉 諸縄c式

第21表 ピット出土遺物觀察表①(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
P-45 1	弥生土器 壺	口径 底径 器高	一 一 一	①被 ②灰褐色 ③石英、白色粒、黒色粒 ④脚部破片	外面: 腹部5本筋の脚部状工具による横位施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 得式
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
P-56 1	石器 磨石・磨石	自然顕を素材とし、表・裏面に頗るな摩耗。中央付近に敲打集中による凹穴。安山岩製。 長さ 14.3 幅 7.9 厚さ 4.7 重量 802.1			覆土・活、 混入		
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
P-91 1	弥生土器 壺	口径 底径 器高	一 一 一	①やや不良 ②褐色 ③石英、角閃石、チャート ④口縁部破片	外面: 折り返し状様。口縁部4本筋以上の彌 縫状工具による横位施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 得式
P-118 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①良好・堅密 ②暗褐色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒、矽 器高 ④脚部破片	外面: 制部單節 RL 繩文を横位施文→ボタン 状・鉤状貼付文を施文。 内面: 斜位のミガキ。	覆土一括、 混入	繩文前期後葉 諸縄b式 外面スヌ付帶
P-121 1	縄文土器 器台	受部径(15.0) 台高 器高	一 一 6.7 6.0 6.7	①被 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒、白色粒 ④2/3	外面: 受部ミガキ。台部横位のミガキ。测定 12箇所の透かし孔。受部の赫辺は摩耗。 内面: 横位のミガキ。	底面直上 2次被熱。 埋納カ	繩文中期後葉 2次被熱。
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
P-188 1	石製品 鋸跡車	金面、平滑に研磨。滑石製。 直徑 3.2 孔径 0.6~0.8 厚さ: 1.0~1.3 重量 20.9			覆土上層		
番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③歯土 ④残存	成・整形技術の特徴	出土層位	備考	
P-222 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①良好・堅密 ②にぶい黄褐色 ③石英、黒色粒 ④脚部破片	外面: 腹部5本筋の脚部状工具による横位の 集合状縄文を施文→半周竹管状工具によ る2本一組の脚部状縄文を施文。 内面: 横位・斜位のナデ。	覆土一括	繩文前期後葉 諸縄c式
P-229 1	弥生土器 壺	口径 底径 器高	一 一 一	①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③石英、黒色粒 ④脚部破片	外面: 腹部5本筋のミガキ→竹管状工具によ る脚突起を付するボタン状貼付文を施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 得式
P-235 1	羽釜	口径 底径 器高	一 一 C.5.9	①酸化カルシウム ②にぶい褐色 / にぶい褐 色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 滲透形容。鉢付後、ナデ調整。 脚部横位ナデ。 内面: 滲透形容。	No. 3 カット2 前面	繩文中期後葉 2次被熱。
P-246 1	須恵器 蓋	口径 底径 器高	(17.2) (16.6) (2.7)	①須天端 ②深白/灰色 ③褐色鉱物 ④1/4	外面: 須縁須天。天井部凹板へラケツリ。 内面: 滲透形容。		
P-256 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④底部破片	外面: 腹部半周 RL 繩文を横位施文。底 部ナデ。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	繩文前期後葉 諸縄b式 外面スヌ付帶
P-266 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	(21.0) (17.7) (7.7)	①良好・堅密 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部横位ナデ→單辯 逆。縄文横位 施文→半周竹管状工具による横位平行沈縄間に同様工具 で爪形文施文。口縁部下にヘラ状工具による横位・斜位のキザミ。 内面: 横位のミガキ。	覆土一括	繩文前期後葉 諸縄b式

第22表 ピット出土遺物観察表②(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③鉗土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-267 1	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①やや不均 ②褐色 ③石英、白色粒(多量)、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 半口縁。口縁部半周竹管状工具による横位・斜位の集合沈紋を施文→ボタント状・棒状附文を施文。 内面: 横位のミガキ。	覆土一層。 ピットは 加付利式 式期。 2次被熱	純文前後葉 器
番号	器種		法量(cm, g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-286 1	石器 多孔石	表面に敲打による凹凸多様。全体に磨痕。一部残存。安山岩製。	長さ<12.8> 幅<6.8> 厚さ<0.6> 重量528.83		覆土一層	

第23表 遺構外出土遺物観察表(単位: cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①施成 ②色調(内/外) ③鉗土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②褐色 ③石英、黑色粒 ④口縁部破片	外面: 半口縁。口縁部半周竹管状工具による横位・斜位の平行沈紋を施文。 内面: 横位のミガキ。	表土	純文前後葉 器
2	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、白色粒(多量)、黒色粒 ④口縁部破片	外面: 刷毛部墨跡R。黒文を横位施文→半周竹管状工具による横位平行沈紋。スス付文。 内面: 横位のミガキ。コガ付文。		カクラン (P-239, 欠番)
3	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、白色粒(多量) ④口縁部破片	外面: 刷毛部墨跡R。黒文を横位施文→半周竹管状工具による横位平行沈紋。スス付文。 内面: 横位のミガキ。コガ付文。	P-55	純文前後葉 器
4	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②にぶい黄褐色 ③石英、チャート、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 刷毛部墨跡R。黒文を横位施文→同心円状のモチーフを施文。 内面: 丁寧な横位のナゲ。	表土	純文前後葉 器
5	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②褐色 ③石英、白色粒(多量) ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部3本筋の組合せ墨跡文で△角形のモチーフを施文。口端部下 部・結合部墨跡文で△角形モチーフを施文。 内面: △角形のナゲ。	P-123	純文前後葉 器十二指式 外面ス付若
6	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①並 ②にぶい黄褐色 ③石英、白色粒(多量)、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 刷毛丸棒状工具による沈紋・半周竹管状工具による墨跡文でY字状のモチーフを施文。△角形のモチーフを施文。 内面: 横位のナゲ。	表土	純文前後葉 器十二指式
7	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好 ②灰黃褐色 ③石英(多量)、長石(多量) ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部竹管状工具によるキズ、 口縁部丸棒状工具による沈文を施文→沈線間に半周竹管状工具によるキズミ、 平行沈紋を施文。内面: 横位のナゲ。	SK-64	純文中期初頭 五重筒I式 外面ス付若
8	調文土器 浅鉢	口径 底径 器高	— ①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英、金雲母(多量)、黒色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部墨跡のミガキ、丸棒状 工具による沈紋と捺印形区画文を施文。 内面: 横位のミガキ。丸棒状工具によ る沈紋は捺印形区画文を施文。	SK-61 P-244	純文中期中葉
9	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②にぶい褐色 ③石英、黑色鉱物、白色粒、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 半口縁。口縁部墨跡R。黒文を横位施文→丸棒状工具による横位沈紋文2条、 同様の工具で沈紋を施文。内面: 横位のミガキ。	P-181	純文前後葉 器
10	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①やや不良 ②灰褐色 ③石英、角閃石(多量)、凝灰岩粒 ④口縁部破片	外面: 刷毛部墨跡形台形の水平な痕跡貼付 →丸棒状工具で捺付した沈線区画文→ 同様の工具で捺付した痕跡を充満。 内面: 横位のナゲ。	P-250	純文中期後葉
11	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、角閃石、白色粒(多量) ④口縁部破片	外面: 刷毛部墨跡文Rを横位施文。 内面: 横位のナゲ。	表土	純文中期中葉 ~後葉
12	調文土器 深鉢	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②灰褐色 ③石英、白色粒、黒色粒 ④口縁部墨跡	外面: 平口縁。口縁部横線ミガキ。断面三角 形の横位捺付と捺付→陰帶直下に横跡 →X字文を横位施文。内面: 横位ミガキ。	表土	純文中期末葉 加曾利E IV式
13	弥生土器 甕	口径 底径 器高	— ①良好・堅敏 ②にぶい黄褐色 ③石英、黑色粒(多量) ④口縁部破片	外面: 刷毛表面不規則波状文を横位施文 →頭部2連止めの横擦痕状文を時 計刻面文→横位のハケメ。	表土	弥生後期 博式
14	灰釉陶器 長須塙か (乳鉢)	口径 底径 器高(2.9)	— ①還元焼 ②灰褐色/灰黄色/灰褐色/オーリー ③灰釉 ④口縁部破片	外面: 灰褐色形、底部墨跡へナゲ→高台點 付→輪縫開窓。窓下部→高台に自然縫 隙。輪縫形、底面のみ自然縫。	表土	10世紀
番号	器種		法量(cm, g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
15	石器 打製石斧	小型楔形。 両側緣部や刃部にリダクションが認められる。刃部周辺に摩耗痕あり。質岩製。 長さ7.7 幅4.5 厚さ1.1 重量48.5			SK47 覆土	
16	石器 打製石斧	短形形。刃部を剥離とし、周縁に直接打撃による周面加工が施される。刃部周辺には使用痕を見ら れる微細剝離痕あり。黑色安山岩製。刃長11.5 幅5.2 厚さ2.1 重量128.6			表土	
17	石器 磨製石斧 (乳鉢)	棒状形。剥離と打撃・研削により剥離加工を施す。表面2箇所及び基部には研磨により新しい 破壊痕が認められる。刃部欠損。石軸に転用か?緑色岩製。 長さ(16.2) 幅6.0 厚さ3.3 重量504.4			P155 覆土	
18	石器 磨石	自然難の表裏に原摩耗痕が認められ、摩耗範囲には部分的に擦痕あり。表裏中央には敲打による 凹凸が4~6回認められる。磨石を磨石に転用。ガジリ多い。安山岩製。 長さ13.9 幅10.4 厚さ5.6 重量964.4			表土	
19	石器 砥石	扁平な自然難を素材とし、表裏に平滑な磨痕が認められる。底面には擦痕が顕著。上・下端部 には敲打痕あり。安山岩製。長さ11.7 幅6.5 厚さ2.8 重量315.1			S104 Na 1	

VI まとめ

剣崎稻荷塚遺跡は都合 5 度の調査を経ている。調査地点は大きく 4か所に分散し、それぞれの調査面積は狭いながらも、本遺跡の輪郭はうかがえるものと考えている。予測の範囲を超えるものではないが、今後の調査のためにも、本遺跡の時代ごとの特徴や性格を再度整理しておきたい。

縄文時代

剣崎稻荷塚遺跡第 2 次調査区（以下、「剣崎 2」などと略表記）には、前期後葉諸磧 b～c 式期の住居跡が 4 軒まとまる。剣崎 1 では有尾期の住居跡 1 軒が確認され、剣崎 4 には有尾期・諸磧期の土坑群が分布していること、剣崎 3 では、湧水を伴う埋没谷（縄文前～中期に谷の埋没が徐々に進行）が地形的境界線を形成していることなどから推察すれば、第 3 図で示した梢円形状の集落域が想定される。剣崎 2 は 8°～14° の南斜面地であり、休感的にはやや急傾斜であろう。弥生・古墳時代の住居跡も密集するが、斜面地を選択した理由が、各時代で共通するのかは不明である。いずれにせよ、剣崎 2 から続く台地東側の斜面地までを居住区域として活用していた可能性を考慮しておこう。稻荷塚前期集落の規模（住居軒数・土坑数・墓域構成など）は不詳ながら、本遺跡地は独立丘状の地形が特徴的であり、中央平坦部および緩傾斜面は土坑群帯や広場として、縁辺斜面地から西側平坦面は居住帶として利用された環状集落構造を呈しているものと予察しておく。整穴住居の時期は有尾期から諸磧 c 期までであるが、土器は前末葉～中期初頭まで継続している。剣崎 4 の柱穴列 S A-1 には大型住居の可能性も残されており、該期のロングハウスが確認された東京都郷田原遺跡の事例をモデルとして挙げておく。

中期後葉は小規模集落と推測するが、剣崎 5 では加曾利 E 2～4 式期が主体をなしている。剣崎 4 では堀之内 2 式期と推定される梢円形土坑が確認されており、造構数・遺物量は非常に希薄ながら、回帰されるべき拠点として長期にわたって認識されていたことがうかがえる。周辺では若田原遺跡が中期後葉～後期前葉の拠点的集落として重要である。剣崎稻荷塚遺跡のように、中期中葉（勝坂・阿玉台期）の空白期を挟んで、前期集落と中後期集落が重複する事例としては、安中市の二軒在家遺跡がある。造構数・住居規模・遺物量のいずれも膨大な遺跡であり、単純な比較は慎むべきではあるものの、長い時間的断絶を介した領域および領域内拠点（集落）の重複現象は、稻荷塚集落の存在意義に関わる問題であろう。

弥生時代

剣崎 2 では後期樽式期の住居跡が 2 軒、剣崎 5 では 1 軒確認されている。周辺には、八幡遺跡・剣崎長瀬西遺跡・引間遺跡という大集落が存在し、本遺跡はこれら 3 地点に囲まれた位置にある。本遺跡において樽式期集落が成長しなかった理由の一つとして、広大な平坦面が確保できない地形的制約が考慮される。

古墳時代

剣崎 4 では明確な造構をとらえることができなかったが、剣崎 2 では中期の住居跡が 6 軒、剣崎 5 でも 1 軒確認されている。渡米系遺物を伴う剣崎長瀬西遺跡や八幡中原遺跡の大規模集落が付近にあり、剣崎天神山古墳・剣崎長瀬西古墳・平塚古墳が周囲に分布する。弥生後期と同じく、本遺跡が大規模集落に発展することはないが、周辺遺跡群の結節点としての立地には注目しておきたい。剣崎支台には剣崎長瀬西遺跡に初期群集墳が構築され、八幡支台には親音塚古墳・二子塚古墳などの首長墓が築造される。これらの間に八幡中原遺跡という大型集落が立地しており、本遺跡はこれら 3 者の関係にあっては末端に位置づけられる。剣崎 2 では 6・7 世紀代の住居が 14 軒確認されており、斜面地と幅の狭い平坦面に近接・重複して構築される。台地頂部の平坦面を広く活用しないことの理由は不明だが、なんらかの規制が働いていた可能性もある。

古代

本遺跡地一帯は倭名抄にみえる片岡郡若田郷に該当する。東山道国府ルートが本遺跡の西側至近を通過するものと予測され、片岡郡衙の存在と合わせて、本遺跡の古代集落形成には深く関わるはずである。第3・23図および写真図版扉で国府ルート推定線を示した。ただし、八幡台地南西部では八幡遺跡の古墳群の間を縫うように通過するものと思われるが、詳細は不明である。また、八幡中原遺跡・七五三引遺跡とはほぼ接してあり、あるいは郡衙域と一部重複する可能性もあるため、考古学的な検証作業が俟たれる。

近世期には剣崎村と下小塙村の間、町屋村と我峰村の間に鳥川の渡し場があり(『新編高崎市史 通史編3近世』p 549)、両地点は比較的近い上に、推定駅路ルートともほぼ合致する。東山道敷設以来、あるいはそれ以前からの渡河点であった可能性もある。国府・群馬駅家から片岡郡衙や野後駅家へ向かう場合、鳥川渡河後、台地縁の急斜面を登りきったところに本遺跡がある。想像を逞しくするなら、郡衙の直前で、休息を兼ねて人馬や物資を整えるような地点であったのかもしれない。

東山道は「牛堀・矢ノ原ルート」が7世紀後半～8世紀代、「国府ルート」は9世紀以降に利用されたものと考えられている。本遺跡の6～8世紀代と9～11世紀代のおおよその集落分布を現状の調査成果から推測すると、前者は南側斜面、後者は台地平坦面に占地する傾向にあり、集落構造の変動には、駅路の路線変更が関わっている可能性がある。

また、八幡町や上・中・下豊原町および板鼻町一帯は、11世紀以降には荘園となっていたようであり、13世紀の仏像銘に「八幡荘」と記載されている(『新編高崎市史 通史編1』)。荘園化が生産活動や集落運営に影響



(昭和45年高崎市都市計画図1/2,500図を改変。遺跡番号は第3図と共通。)

第23図 詳細遺跡分布図

を与えた可能性もある。剣崎4で確認された鍛冶遺構は10世紀前半であり、多数の古代のピットや掘立柱建物の大半も10世紀以降と推測される。剣崎1から出土した11世紀代の金銅製神像と分銅形六面体石製品や、剣崎3の墓坑などは「八幡荘」の時期にあたる。至近距離にある片岡郡衙の機能が衰退・形骸化する一方で、他方では10～11世紀代に集落運営や信仰活動は活発化している。その背景や理由の一つに、受領層等による荘園運営が挙げられるかもしれない。

ところで平忠常の乱（1031）を平定したこと有名な源頼信は、長保元年（999）に上野介に任せられており、荘園化は頼信が上野介の頃と言われている（前掲文献）。社伝では、天徳元年（957）に石清水八幡宮を勧進したのが創建であり、源頼義が前九年の役（1051～1062）の戦勝祈願のために立ち寄り、結果勝利したので、船岡宮上に社殿を造営したという。義家も後三年の役（1083～1087）の際に戦勝祈願し、跡を張ったという。いずれにせよ、八幡荘と八幡宮は源氏に関わりが深く、平安末期には新田氏の所領となつたようであり、鎌倉攻めの際には、ここに軍勢を集結させている。

中近世

本遺跡とは谷を挟んだ若田支台先端部が、剣崎小路城あるいは鳴熊城（屋敷）に比定されている。永正4年（1507）、福田忠政が関東管領上杉頃定の勤めで鳴熊城を築いたといわれる。また、柴田勝家の孫（養子の子）にあたる柴田勝重が、慶長4年に徳川家康より旗本領2000石を与えられ、剣崎小路城に居城したとされている。詳細は不明ながら、戦国期以降、本遺跡地一帯は福田氏や柴田氏の所領となつていて、各遺構の時期を特定することは難しいが、掘立柱建物や柱穴列、円形土坑群は、戦国期以降近世前期頃に構築された可能性がある。

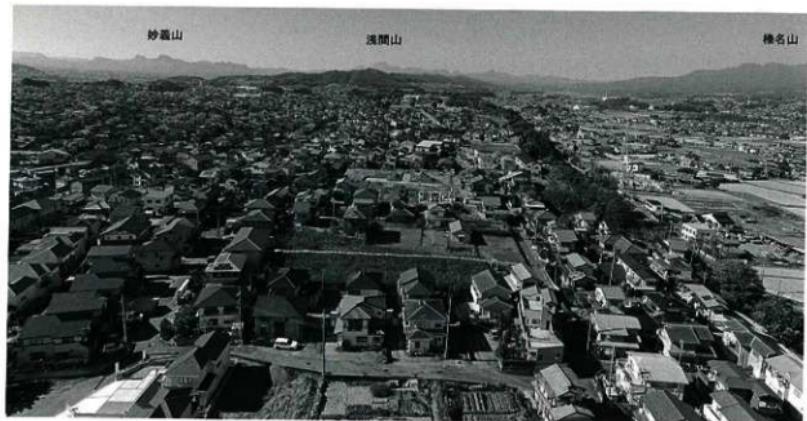
おわりに

剣崎稻荷塚遺跡は、現状では各時代を通じて大規模集落などを形成していないように見えるが、今後に調査が進めばその性格や意義は変わらう。

縄文時代前期は環状集落を形成していた可能性が高く、現状では遺物量や住居軒数は多くならない印象を受ける。地形的には、西側の湧水を伴う谷から、東側の急斜面（現状は擁壁）まで直線で270mを割り、北側の急崖から剣崎2までは200mを測る。前期集落がこの地理的制約内に収まることはほぼ間違いない。第23図のトンネルは前期集落の想定範囲を示しているが、住居帶外縁の施業帶までを包摂した集落規模を精確に推測することは難しい。ただし、集落の平面的なサイズと遺構数・遺物量が必ずしも比例的関係はないことの意味を考える必要が生じるかもしれない。

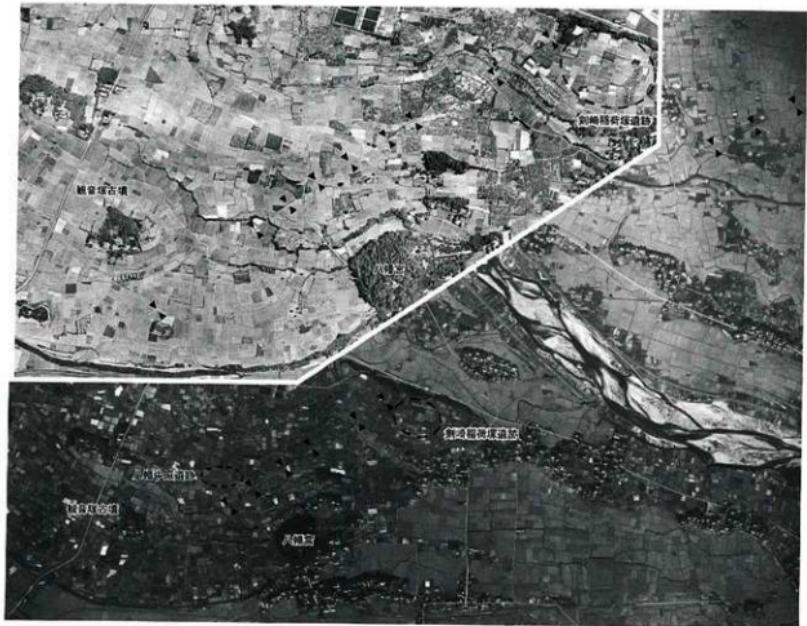
弥生時代・古墳時代にあっては、大規模集落や古墳群をつなぐ経路上や中間点付近に位置していることに注意しておきたい。また、剣崎長瀬遺跡・八幡中原遺跡・八幡遺跡からみれば、本遺跡は烏川渡河点に最も近い剣崎支台上の集落遺跡として捉えることもできよう。

古代については、今後の調査研究によって片岡郡衙や八幡荘の実態解明が進むことを期待するとともに、近い将来において八幡台地上での東山道の発掘調査が行われ、考古学的に検証されることを望む。



剣崎荷塩遺跡4 調査区遠景（東から）

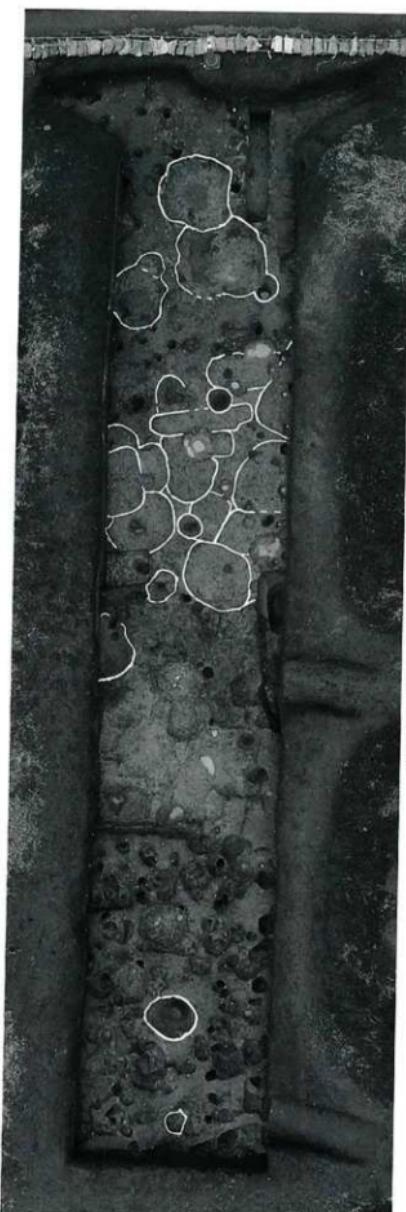
写 真 図 版



米軍航空写真に見える直線状地跡（国土地理院 1948年 USA-R1847-A-31 / 左上 : 1946年 USA-M165-A-6-5、縮尺任意）



剑环面锈蚀情况4 空相全片 (上为北)



剑环面锈蚀情况4 腐文清晰 空相全片 (上为北)



调查区全景（西）



道路扯张区〔中央部〕全景（北東）



道路扯张区〔北部〕全景（南西）



道路扯张区〔南部〕全景（南西）



SI - 6〔道路扯张区南部〕全景（北西）



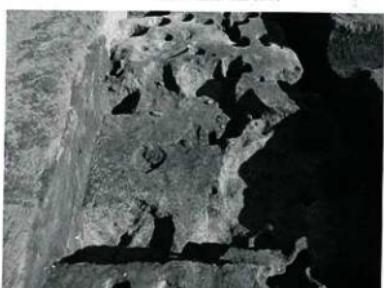
SI-1 全景・遺物出土状況 (西)



SI-1 土坑1 土層断面 (西)



SI-1 貯蔵穴 遺物出土状況 (南西)



SI-3 完掘・SI-1 掘り方 全景 (西)



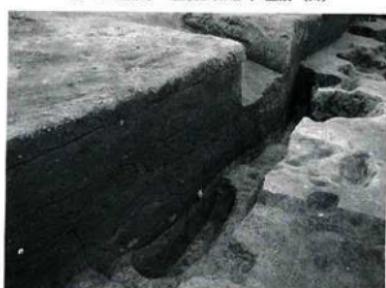
SI-3・SI-1 掘り方 全景 (西)



SI-3 鋼冶炉・土坑2(旧炉) 全景 (西)



SI-2 掘り方 全景 (西)



SI-2 土層断面 (北東)



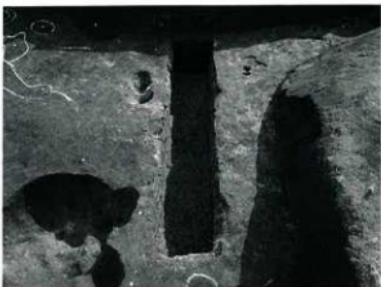
SI-4 全景・上层断面 (北)



SI-5・P-230 全景・遗物出土状况 (南西)



SL-1 烧土检测状况 (西)



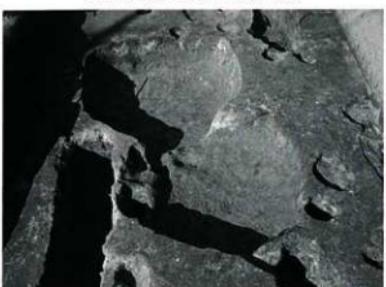
SK-1 全景 (西)



SK-3 全景・遗物出土状况 (东)



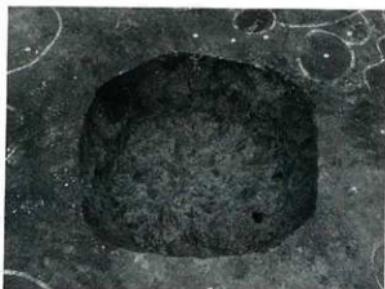
SK-3 遗物出土状况近景 (南东)



SK-3・16 全景 (东)



SK-5 全景 (东)



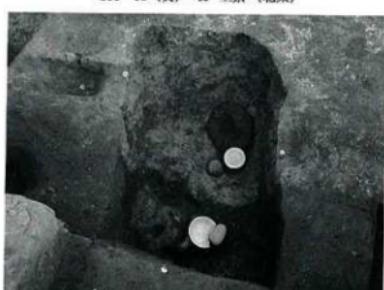
SK - 9 全景 (南)



SK - 13 (奥)・40 全景 (北東)



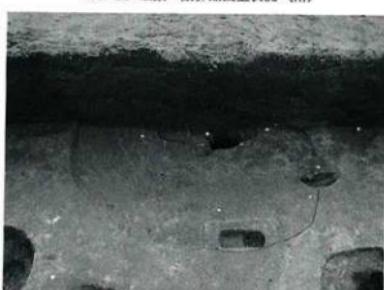
SK - 17・40 全景 (東)



SK - 25 全景・副葬品出土状況 (南)



SK - 25 土層断面 (東)



SK - 26・SK - 27・P - 45 全景 (北)



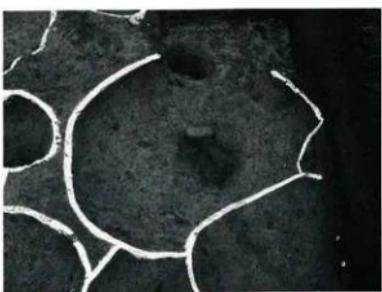
SK - 35 (柱穴) 土層断面 (西)



SK - 54 (柱穴) 土層断面 (西)



SK - 72 全景・遺物出土状況（南東）



SK - 81 全景・遺物出土状況（北）



縄文土坑群 全景（南）



中近世ピット群・SD - 1 全景（西）



P - 70 跖出土状況（東）



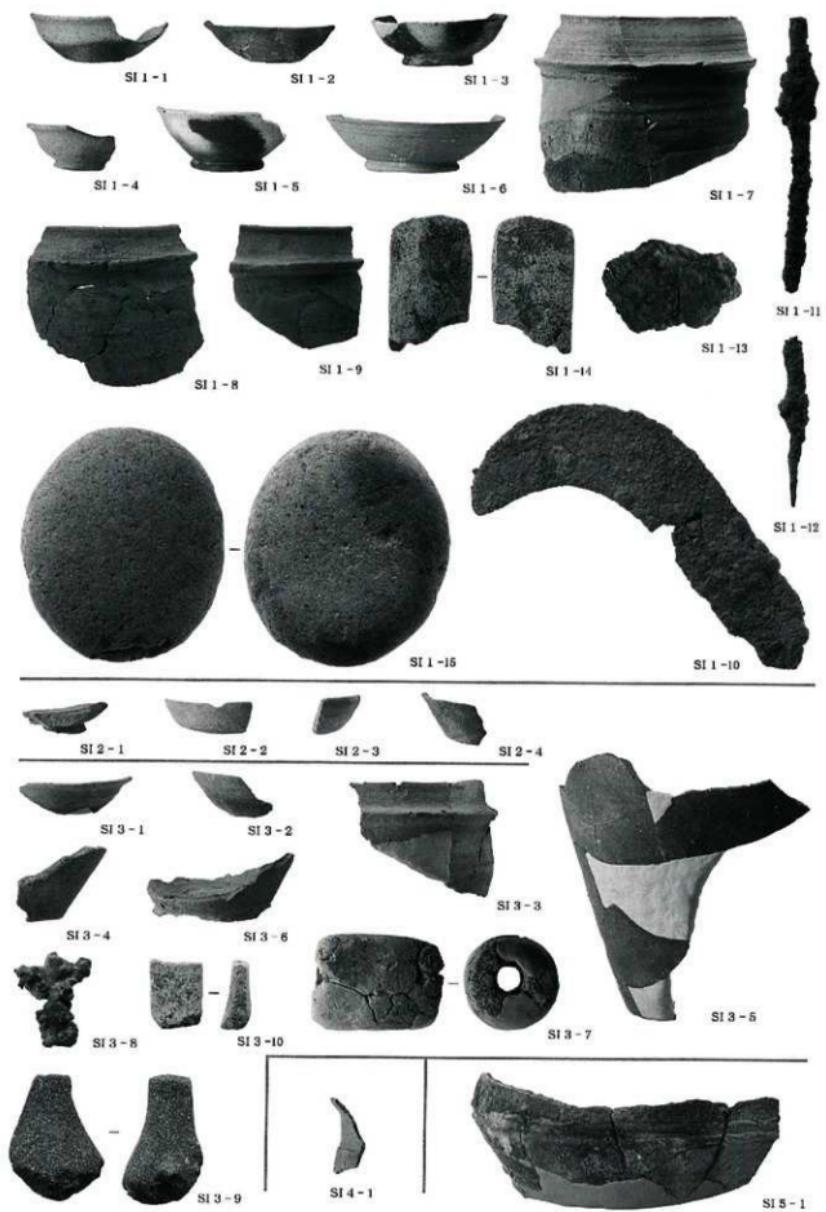
P - 121 全景・鶴台出土状況（西）



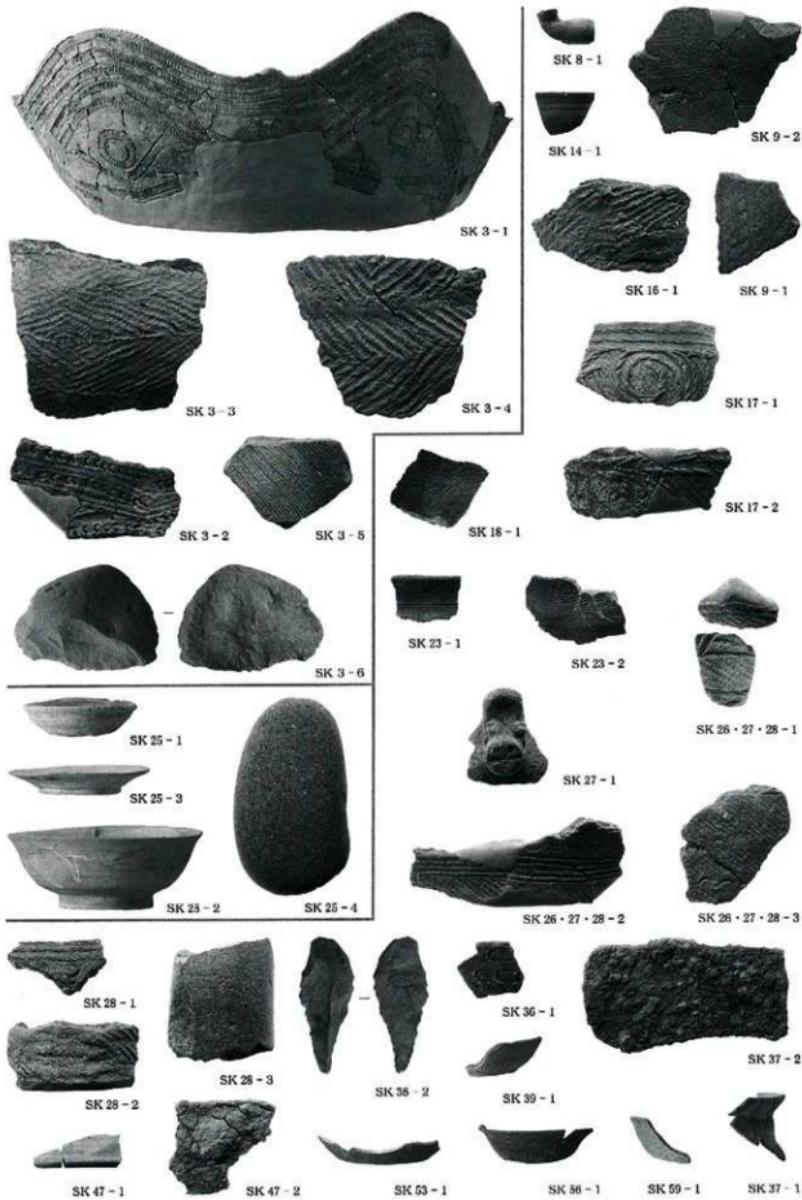
P - 155 磨製石斧・被然鐘出土状況（東）



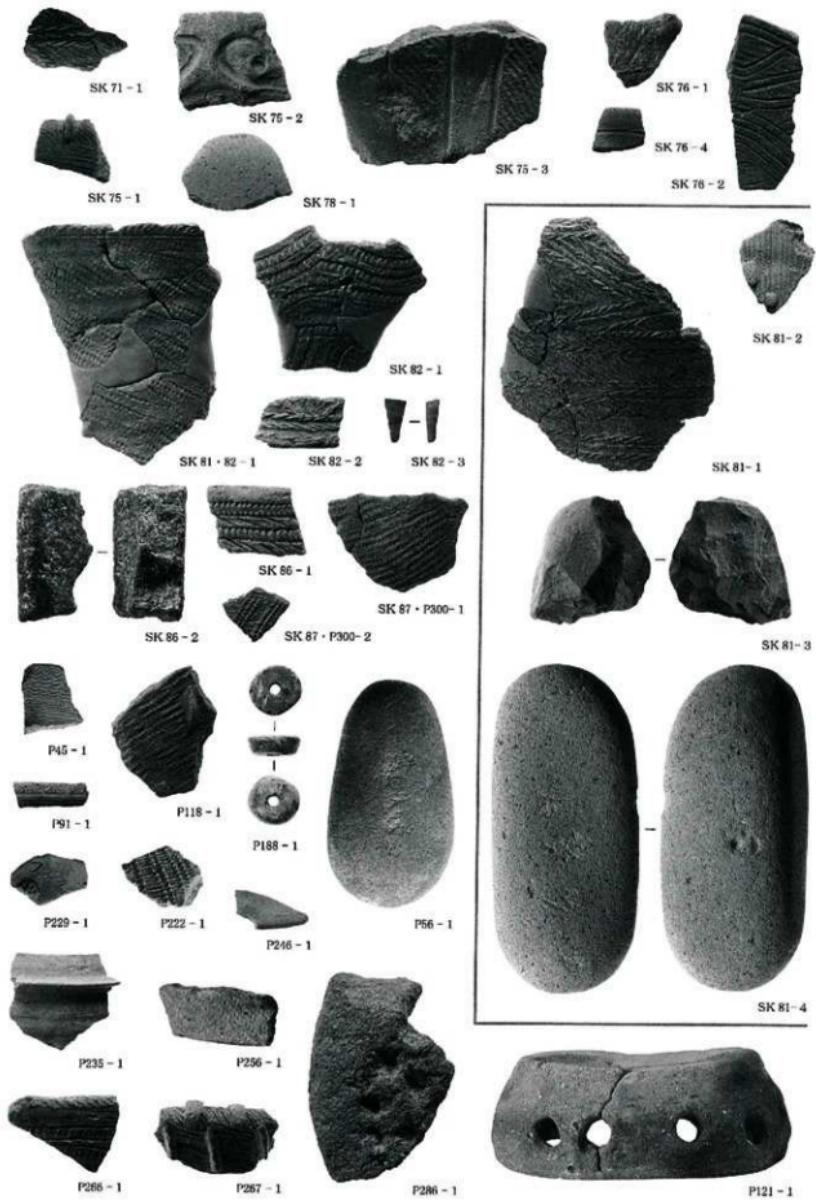
P - 226 馬齒検出状況（南）



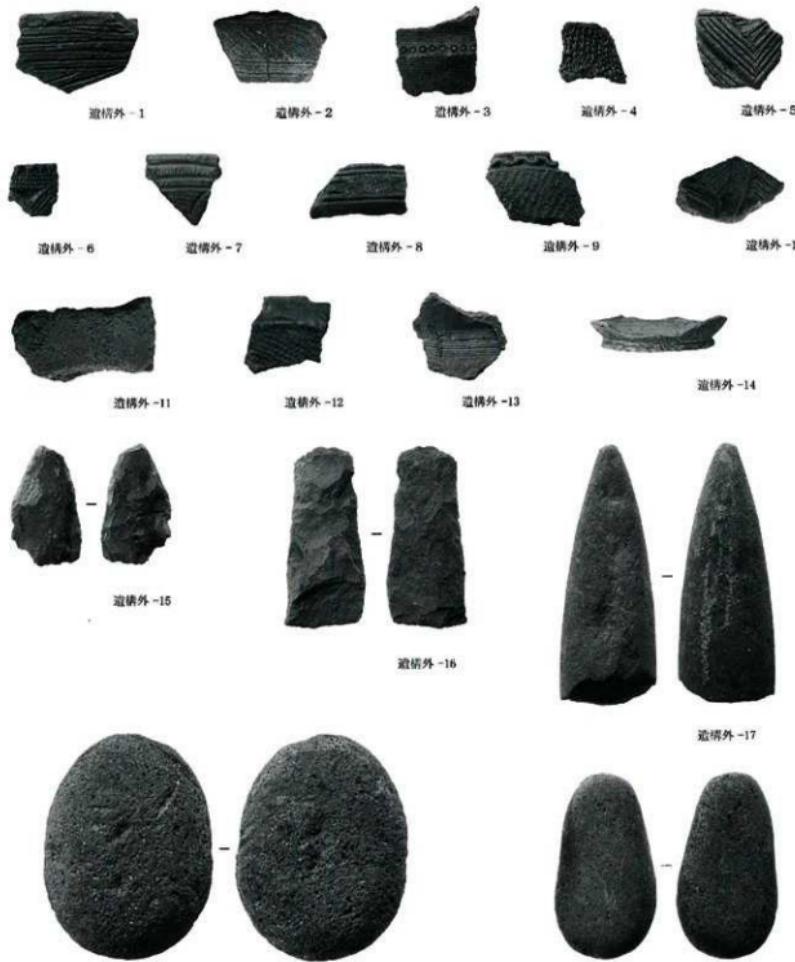
出土遺物（1）住居跡・堅穴狀造縫



出土遺物 (2) 土坑①



出土遺物（3）土坑② / ピット



出土遗物 (4) 迹桥外出土遗物

抄 錄

フリガナ	ケンザキイナリヅカイセキ 4
書名	剣崎稻荷塚遺跡 4
副書名	一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
卷次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第373集
編著者名	矢島 浩 南田法正
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 TEL. 027-265-1804
発行機関	有限会社毛野考古学研究所
発行年月日	西暦2016(平成28)年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)			
剣崎稻荷塚遺跡	群馬県高崎市 剣崎町字稻荷塚 766番1、766番2	102020	656	36° 20' 44" 138° 57' 19"	20150901 ~ 20151111	151	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
剣崎稻荷塚遺跡 (第4次)	集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	豎穴住居跡 (縄文遺構1軒) 掘立柱建物跡 焼土跡 土坑 ビット 溝	7軒 縄文土器 弥生土器 土師器 1基 須恵器 83基 陶器 284基 磁器 1条 中近世上器 灰器 土製品 石器 石製品 金属製品 動物遺体 人骨(臼齒)	縄文時代前期集落の土坑群を主体とする。前期中葉～後期前葉までの遺構を確認。 10世紀の豎穴住居跡は小鍛冶遺構を伴う。工房跡と推測。同時期頃の墓坑からはヒトの歯とともに副葬品の須恵器や灰釉陶器塊・段皿が出土。

高崎市文化財調査報告書第373集

剣崎稻荷塚遺跡 4

一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一

平成28年5月25日印刷

平成28年5月31日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所

発行／有限会社毛野考古学研究所

前橋市公田町1002番地1

TEL 027-265-1804

印刷／朝日印刷工業株式会社

